東方生活録

幻想郷の住人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方生活録

【Ｎコード】
Ｎ１３９５Ｕ

【作者名】
幻想郷の住人

【あらすじ】
【修正中】【工事中】

極めて近く、限りなく遠い世界……「幻想郷」
そこは忘れられし者が行き着く世界。
その幻想郷に堕ちてきた者達がいた。

これはその堕ちてきた者達の話である。

感想を書いてもらえると執筆速度が１．５倍になります。

第1話　墜ちてきた男

日常は同じ事の繰り返しだと俺は思う。

朝に起きて、朝飯食べたら、学校へ行き、授業を受けて、家に帰る。

それから夕飯を食べて、風呂に入り、勉強してから、布団で寝る。

そして朝になれば、同じ事の繰り返し。

俺はそんな毎日を過ごしていた。

そしてある日の夕方……。

「ふぅ……授業も終わったし帰ろう。……それにしても”奴ら”には会いたくないなぁ……」

俺はホームルームも終わり学校を出る。

そして山が綺麗に見える家路についた。

この後もいつもと同じ日常を過ごすはずだった…。

「う……痛たた……」

俺は気がつくと見知らぬ場所に居た。

周りには木が生い茂っていた……森なのかな？

体が結構痛い……まるで高いところから落ちた感じだ。

上を見ると崖があった。

そしてさらに上を見ると空が赤く染まっていた。
おそらくあそこの崖から落ちたのだろう。
「何で俺はこんな所に……うーん……」
俺はここに居る理由を思い出そうとした。
しかし学校から出たところまでしか思い出せなかった。
まるで記憶に靄がかかったように。
「どうやら記憶喪失というやつらしいな……とりあえず今ある情報をまとめてみよう」
俺の名前は風戸（かざと）　響介（きょうすけ）。
普通の一般人だ。
ズキッ！！
「痛っ……」
なんか”普通の一般人”って考えたら頭痛が走った。
理由は知らない……俺は多分、普通じゃないのかな？
で、他は……特に無いなぁ…。

あえて言うなら記憶のところどころに獣と人間のハーフみたいな人がいるぐらい……。

小さい時に遊んでもらった記憶がある。

「え～っと……どうしようか……」

俺は頭を触った。

すると手に何かついた。

手の平を見ると……少量ながら血がついていた。

「やばいな…。とりあえず治療しないと……」

俺はふらふらしながら立ち上がった。

そしてあても無く歩きだした。

俺はふらふらしながら歩き続けた結果、やっと森を抜けた。
空を見ると色は余り変わっていない。
どうやら大した時間は歩いてないようだ。
視線を前に向けると目の前には草原が広がっていた。
「痛たたた…。かなりやばいんじゃない……かな？」
俺の視界はぼやけてきた。
しかもさっきよりふらふらしてきている。
なんとか体勢を維持しながら向こうを見た。
視界がぼやけているため、確証は無いが里のようなものが見る。
距離は数十メートル。
普通なら歩ける距離なのだが、今の俺には歩けない。

歩くどころか踏み出せないのだ。

そして体に力が入らなくなりうつぶせに倒れた。

「ははは……これ、夢だといいなぁ……」

ここで俺の意識は途切れた。

そして気がつくと俺は仰向けになって天井をみていた。
多分、本日二回目の目覚めだ。
「……あ、あれ？　……生きてる……のか？」
俺は体を起こし自らの頬をつねった。
「痛っ！」
痛かった・・・ということは夢では無いようだ。
「ん？　じゃあ気絶までが夢なのか？　…う～ん……」
今度は頭をさすった。
頭には包帯が巻かれていた。
推測だが気絶までも夢では無いのだろう。
「しかし夢では無いのなら……ここはどこだ？」
周りを見渡すと襖、床を見ると畳、そして俺は布団に寝かされている。
「きっと……どこかの家なのか？　……ここの人が来るまで狸寝入りでも……してようかな」
人の家を歩きまわるのは、さすがに気が引けるので布団で待つことにした。

しかしその前に襖が開いた。

「お目覚めのようね。気分はどうかしら？」

現れた人は銀色の髪をした医者のような人だ。

どうやらここの家の人らしい。

「えぇ、ところでここはどこですか？」

「ここは迷いの竹林にある永遠亭よ。診療所でもあるわ」

優しそうな人だなと思った。

「痛たた……。えっと……名前は？」

俺はゆっくりと体を起こしてから名前を聞いた。

すると笑顔で、

「私は八意　永琳。ここで医者をしているわ」

と自己紹介をしてきた。

「でも……なんで俺は竹林にいるんですか？　里の方で倒れたはず……」

素朴な質問をぶつけた。

まぁ……きっと永遠亭まで誰かが運んでくれたのだと思っていた。
しかし返ってきた返事は少し違かった。
「え？　そうなの？　聞いた話によると竹林の前で倒れてたらしいけど……」
あれ？なんか誤差があるようだな・・・。
「う～ん……。おかしいな……。痛っ！」
俺は記憶と証言の誤差を修正しようと記憶を遡った。
しかし思い出そうとすると少し強めの頭痛がした。
しかしそれは一瞬ですぐに治った。
「まぁ今日はゆっくりしていくといいわ。今日はもう暗いしね」
永琳さんがそう言ってくれた。
「ん……わかりました。お言葉に甘えさせてもらいます」
今日は永遠亭に泊まる事になった。
「ご飯は後で鈴仙……私の助手が持ってくるからよろしくね」
永琳さんはそれだけ言うと部屋から出ていった。
「……さてと、安静にしておくとしようか」

俺は寝転がった。

そして天井を見ながら頭の中で色々考える、

（一体……俺は何者なんだろうな……）

普通の人間とか考えると頭痛が走る。

記憶の所々で出てくる人と獣のハーフの女性。

過去に一体何があったのだろうか……。

しかし今の俺には到底、答えは導き出せない。

「はぁ……時間を掛けてでも思い出していくしか無いかな？」

こう呟いた時、襖が開いた。

「おじゃましま～す……。食事を持って来ました」

兎耳を生やしてブレザーを着た女性だった。

どうやら永琳さんの助手のようだ。

「ありがとう。よいっ……しょっと」

俺は体を起こした。

「余り無理しないで下さいね？」

女性は夕飯をおいて隣に座った。

「あぁ、可能な限り無理はしないさ。……えっと、名前を聞かせて貰っても良いかな？」

「私の名前は”鈴仙・優曇華院・イナバ”。呼ぶ時は気軽に鈴仙でいいです。」

鈴仙はそう自己紹介した。

それにしても……瞳が赤い。

（この眼を見てると……何か思い出しそうだ。赤い瞳……赤い瞳……）

俺はそう思い、考え込んだ。

「あの……大丈夫ですか？」

鈴仙が心配そうに話しかけてきた。

「ん……大丈夫。少し考え事してただけだから」

「なら良かったです。夕飯は一人で食べれますか？」

「あぁ……小さくてもいいから机を用意して欲しいな。膝の上は零しそうで怖いからね」

俺は笑顔で鈴仙にそう言う。

すると鈴仙はすぐに机を持ってきてくれた。

「ありがとう。助かるよ」

「それでは失礼します」

鈴仙は部屋から出ていった。

「赤い瞳…か。なんか引っ掛かるんだよな……」

頑張って思い出そうとするが何も思い出せない。

「とりあえず頑張って思い出そう…。う～ん……」

俺はまた考え始めた。

しかしその直後、

グゥ～～～。

腹の虫が鳴った。

「よし。食べてから思い出そう」

俺は夕飯にがっついた。

病院の料理って余り美味しくなさそうなイメージがあったが、ここは違った。

メチャクチャ美味い。

これ以外では表現出来ない。

なので綺麗サッパリ完食した。

第2話　記憶の鍵探し

「……ん？　朝か……」

結局昨日は何も思い出せなかった。

理由は考え込んでるうちに寝てしまったからだ。

本当にうっかりしてしまった……。

だが怪我は治ったので俺は退院（？）することになった。

余り長く居座るのも迷惑かと思い、逃げだそうとしたのだが永琳さんに止められた。

「せめて朝ご飯ぐらい食べて行きなさい」

どうやら朝ご飯を食べないと出れないらしい。

なので俺は朝食を食べる事になった。

朝食を食べて今は外に居る。

「それじゃあ道中気をつけてね」

「お世話になりました」

俺は永琳さんに見送られて迷いの竹林を後にした。

俺は自らの記憶と証言の誤差を修正するために今、自らが倒れた場所を探している。

「確か昨日はここら辺で……ん？　これかな？」

不確定だが見つけた。

地面に血がついていたから発見は簡単なのだが……俺のかどうかはわからないのでどうしようもない。

「人里に向かってみよう。何かわかるかもしれない……」

俺は人里に向かって歩き出した。

人里の入り口の前に到着した。
外から見た大通りは中々活気があった。
「ここか……中々賑やかじゃないか」
「おや？　見かけない顔だな。何者だ？」
長髪の女性が話しかけてきた。
「えっと……普通の人間です？多分。痛っ……」
また頭痛がした。
「何だ？　自分が何者かもわからないのか？」
「まぁ……記憶喪失というやつです」
「しかしすぐに里に入れる訳には行かない。君からは膨大な妖力を感じるからな」
そんな簡単に入れてもらえないようだ。
って妖力？
また何か引っ掛かる……。
「妖力？　……確か数百年前、首筋の辺りに……あれ？　何かあったっけ？」

俺は自分でもわからない事を言った。

しかも数百年前って……人間の寿命は百年程度じゃなかったっけ？

「首？　少し後ろを向いてみろ」

「は、はい」

俺は後ろを向いた。

「……ん？　これは……刻印か」

「刻印？　……なんか色々と引っかかるな……」

どうやらここには俺の記憶を取り戻す鍵がありそうだな……。

「……君。少し待っててくれないか？」

「？　……わかりました」

女性は里の方へ走っていった。

しばらくして女性は新たな女性を連れて戻ってきた。

う～ん……永琳さんや鈴仙もそうだが美人多すぎだろ……。

「待たせてすまないな」

「いえ、大丈夫です。ところで……その方は？」

連れてきた女性は日傘をさしていて扇子を持っていた。

「私は八雲　紫。幻想郷の管理者よ。よろしくね」

「風戸　響介です」

って幻想郷？

なにそれ？

とりあえず後で聞いてみようっと。

自己紹介をすると女性が紫さんに話しかけた。

「紫。ここは任せていいか？　私は寺子屋で授業をしないといけないから……」

「えぇ。構わないわ」

「それじゃ、失礼する」

女性は走っていった。

「それじゃ、後ろ向いてちょうだい」

「また……わかりました」

また後ろを向いた。

何回後ろを向くことになるのだろうか……。

「なるほど……。まだ目覚めていないようね……でも膨大な妖力が漏れ出ているわ……」

「？　……何を言ってるんですか？」

「いえ、何でもないわ。そんなことより貴方……妖力にくわえて魔力や霊力まで持ち合わせているなんて……」

なんか深刻な表情してるぞ？

何故？

「いや……俺に聞かれてもわかりませんよ……」

「そう……。とりあえず荷物だけ確認させて？」

荷物？そんなものは無いよな……。
俺はとりあえずポケットを漁った。
すると手に何か当たった。
「何だ？　これ……宝石？」
ポケットから取り出したものは真紅のルビー。
よく見るとルビーの中に黒い蛇のようなものがあった。
紫さんは宝石を見た途端、顔を宝石に近づけた。
「これよ！　……やはりこっちもまだ目覚めてないようね……」
「？……」
なんか色々と忙しい人なのかな？
「あとは霊力なんだけど……何か心あたりは無い？」
「記憶喪失の俺に言われても困ります……」
そう言いつつも思い出そうと頑張ってみた。
しかしやはり記憶に靄がかかっていて思い出せない。
その時、頭の中に一筋の光が見えた。

そして記憶の中の一部分の靄が晴れた。

「ん？　……あぁ、そういうことか……」

「ん？　どうしたの？　なにかわかったのかしら？」

「まぁ少しだけ……。でも話したくないです……」

俺は先に話すことを拒否した。

こんな普通の人間には関係ないし、関わらせたくない。

「……そう。話せるようになったら話してちょうだいね」

「すいません……。わがまま聞いてもらって」

「気にしなくていいわよ。誰しも話したくない事はあるものね」

紫さんは俺の肩を持った。

優しい人だな……紫さんって。

「それじゃあ……失礼します」

「機会があったらまた会いましょうね」

「また……いつか」

俺と紫さんと別れた。

人里を離れて今は草原の中を歩いている。

「あ、幻想郷について聞くの忘れた。……まぁ今度聞くとしようか……」

その時、激しい頭痛を俺を襲った。

「ぐっ……うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

頭が割れるような痛みだ。

その痛みはさらに増していく。

「ち…畜生……」

俺は何とか見つからないために背丈の高い草が多く生えている場所

に倒れる。

「いったい……なんだって言うんだよ……」

俺の意識は痛みによって朦朧としてきた。

そして意識がとても深い闇に落ちていった。

深い闇の中をさまよいやっと出てみると周りは草だらけだった。

「そういえば……隠れてたんだよな……」

俺は立ち上がった。

そして周りを見るとすっかり夜になっていた。

「満月か……とりあえず……すぐ近くに川があるみたいだから顔を

洗おうかな……」

俺はゆっくり歩き出した。

川に着くと水面が綺麗に輝いていた。

俺は顔を洗うために水面に屈み込んだ。

すると俺はひとつ異変に気がついた。

「さて顔を洗うとしよう……ん？　左目が赤くなってる……」

そう。左目が真っ赤なのだ。

充血してるわけでは無く、瞳が赤に染まっている。

（治る……よね？）

そう思いながら顔を洗った。

「はぁっ……すっきりした。…しかし目は治らないか……」

俺は立ち上がった。

そして振り向くと

「……」

金髪の女の子がいた。

「こんな時間に出歩くなんて危ないから帰りな。送ってあげるからね」

「……貴方は食べてもいい人類？」

「いや～食べれないと思うよ～？」

俺は小さい子供だと思っていた。

「そーなのかー」

「そーなのだー」

だってこんな会話してたら普通はそうなると思う。

「ほら、里ならあっちにあるから帰るといい」

「私……人間じゃないの……じつは妖怪なの」

「へぇ……そうなんだ」

俺はただの冗談だと思い、軽く受け流した。

しかしここからはまったく冗談とは思えない事が起こった。

第3話　能力の開花

「……うん。だから貴方を……食べるわ」

金髪の少女から何か強い力を感じた。

覇気のようなものではなく、恐怖を煽る感じの力だ。

「くっ！？　な…なんだ？この感じ……」

「それじゃ……いただきます」

俺が僅かながら恐怖を感じた瞬間、少女は俺に迫ってきた。

しかも浮きながら。

「危なっ！！」

俺は回避行動した。

しかし避けきれずに少女の爪が俺の腕を掠る。

服が破れ、血が出る。

「まさか本当に……妖怪……なのか？」

俺は信じられなかった。

こんな可愛い子が妖怪だなんて……。

「よく避けたわね……。でも次は逃さない……」

少女はまた向かってきた。

俺は何とか避けようとするが……

「くぅっ！？」

避けきれずに腹の部分の服が切り裂かれた。

激しい痛みが俺を襲った。

俺は地面にうずくまる。

「……」

少女はトドメをさすためにゆっくりと近づいてくる。

「はぁ……はぁ……」

俺はゆっくりと立ち上がった。

「まだ……立てたのね……」

「俺は……まだ……死ぬわけにはいかないんでな……」

「へぇ……でも貴方はただの人間。私は妖怪。勝てるわけがないわ」

確かに彼女の言う通りだ。

勝ち目は０に等しい。

それなのに人里に逃げずに俺は少女と向き合っている。

「なんでだろうね……恐怖は感じるけど……逃げるって答えが出ない」

「そうね……今まで襲った人間は皆、逃げていったわ……でも貴方は逃げてない」

「多分……逃げる必要が無いから……かな？」

「その余裕……どこから出てきてるかわからないけど……粉々にしてあげるわ！！」

少女はさっきより速いスピードで迫ってきた。

俺はそんな中で頭の中に誰かの声が響く。

（伏せろ！！）

「え？　誰！？」

（いいから早く！！）

「あ、あぁ！！」

俺は素早い動きで伏せた。

伏せたら少女の攻撃を完璧に避けることが出来た。

「誰の声だ？　……どっかで聞いた事があるような……」

（はぁ……久々に起きてみたら危ないところだった……全く……お主は何をしとるんだ！！）

頭の中で誰かに怒られた。

「す、すいません！！　……ってだから誰？」

（なんだ……忘れたのか？　儂は銀狼。お主の刻印に宿る妖怪だ）

銀狼と名前を聞いた途端、頭の中の一部分な靄が取れた。

「銀狼……確か数百年前に……”あの人”から貰った妖怪……」

俺は思い出した事を呟いた。

そんな時、少女がゆっくりと俺に向かって歩いてきた。

「誰と話してるの……ってなんで人間にこんなに妖力があるの！？」

「ん？　妖力？　……確か紫さんがそんな事を言ってたな……」

（しかしお主……何故こんなに弱いんだ？　以前はあんなに強かったのに……）

「記憶喪失というやつでな……昔の記憶とか無いんだ」

もし、そんなに強いなら身体が勝手に動いてもいいはず……。

全く……中途半端な記憶喪失だな。

「あ、そういえば名前聞いてなかったな。君の名前を教えてくれないか？」

「ルーミアよ」

「ルーミアか……よろしくな」

「……どうして貴方はそんなに余裕なの！？さっきまで私に食べられそうになってたのよ！？」

「ん～……なんでだろ？」

余裕な理由は俺が一番知りたい。

自分でもわからない余裕ってなんだよ……。

「なっ！？」

「まぁ、何とかなると思ったんじゃない？」

（まぁお主の本来の力は強力だからな……）

「へぇ……そうなんだ」

「もう良いわ！！　絶対にその余裕ごと食べるから！！」

かなり苛立ってるようだ。

何か悪い事でもしたかな？

「銀狼……戦いのサポートを頼む。俺本来の力とやらを引き出す為に」

（よかろう。協力する）

「行くわよ！！」

ルーミアは闇の剣を作りだし、迫ってくる。

「銀狼！！どうすればいい！？」

（とりあえず”武器を出したい”と念じろ）

「あ、あぁ！！」

（そして叫べ！！　”星穿（ほしうぎ）の神槍（しんそう）”と！！）

「星穿の神槍！！」

俺は銀狼に言われるまま、そう叫んだ。

すると目の前に槍が現れた。

棒の上下に両刃が付いた槍だ。

俺は星穿の神槍を掴み、ルーミアの剣を受け止める。

「貴方……本当に人間なの？」

「……人間じゃない。だが妖怪でもない。……それだけは確かだ」

（うむ……今のお主の姿は本当の姿では無いからな……）

どうやら銀狼は本当の俺を知ってるみたいだ。

あとで聞いてみよう。

「はぁっ！！」

とりあえず俺はルーミアと距離をとった。

「なぁ……遠距離武器は無いのか？」

（あるにはあるが……捕縛技だぞ？）

「それでも良いからさ。教えてくれよ」

（わかった。あ、あとお主の技は基本的に念じる事で発動出来る）

「わかった」

（よし、”動きを封じたい”と念じろ。これで封じれる）

「喰らいなさい！！」

ルーミアは闇の剣を振り下ろしてきた。

「おっと……はっ！！」

「きゃっ！？」

俺は回避してルーミアの動きを封じた。

自らの手を見ると緑色に輝いていた。

ルーミアのからだの周りにも緑色の幕がある。

これを見た途端、頭痛がして何か言葉が蘇った。

「痛っ…。念…動…力…？」

（そう。念動力。お主の能力の名前だ）

「へぇ……なるほど。理解した」

（で、拘束したのはいいがこの後はどうするんだ？）

「そ～だな。……」

俺は考えた。

投げ飛ばす？叩きつける？回す？

なんとなくだがどれも面白くない。

「放してよ！！」

ルーミアは身体を動かせずにいる。
「そうだ。ならばこうしよう」
「ひゃっ！！」
俺は念じてルーミアの上下を入れ替えた。
スカートは念動力で押さえてあるから問題ない。
「さて……どうしようか」
「戻してよ～！！」
「あと少ししたらな」
（何をする気なのだ？）
銀狼がそう尋ねてきた。
「ふふふ……飛ばすだけだ」
「え？　ちょっと？」
「しかもただ飛ばすのでは芸が無い。回しながら飛ばす」
「やめてぇ！！」
ルーミアが必死の抵抗をするが、無視。

「んじゃ、またな」

「きゃあぁぁぁぁぁあ！？」

俺はルーミアをこまのように回転させながら空高く飛ばした。

速度は中々で、綺麗な放物線を描いて山に落ちていった。

「ふぅ……一時はどうなるかと思った」

（全くだ。とりあえずお主は頑張って記憶を取り戻すのだ。わかったか？）

銀狼はそう言った。

「……うん。頑張る」

俺はその銀狼の言葉を曖昧に答えた。

（それでは儂は少し寝る）

「おやすみ。またよろしくな」

（あぁ……おやすみ）

ここで銀狼の声が聞こえなくなった。

「はぁ……とりあえず寝ようかな？　結構疲れたし……」

俺はその場で寝ようと寝転がった。

そして眠りにつこうとする。

しかしその前に一つ、重大なミスに気がついた。

「銀狼に記憶について聞くの忘れてた……」

俺は失敗を少し悔やみながら眠りについた。

第４話　新たな仲間

気がつくと日が昇っていた。

「……ん、朝か……」

俺は身体を起こして伸びをした。

そして傷を見るため視線を下に向けた。

しかしまた異変があった。

「昨日の傷大丈夫かな？　……あれ？　傷が……無い」

傷が綺麗サッパリ消えているのだ。

服は破けているものの、身体に傷跡は全く無い。

そして頭の中に一つの単語が浮かんだ。

「……自己再生？　再生速度、早過ぎないか？」

俺は疑問を持ったが、それを否定する言葉が見つからなかった。

「まぁ……便利だから良いか……とりあえず今日は歩いて付近を探索してみよう」

俺は気をとり直して周辺を歩き出した。

人里を少し離れ、初めて目が覚めた森の中へと入った。

ここに来た理由……それは

「なんか鞄とか無いのかな？」

ただ忘れ物が無いか探すためだ。

もし忘れ物があったら記憶を取り戻すきっかけになるかもしれない。

そう思って実行しているのだ。

「まぁ、探す範囲も小さいから楽だし……」

俺はそのまましばらく探していた。

今はちょうど日が真上に見える時間帯だ。

俺はあれからしばらくは、諦めなかった。

しかしその努力は実らず、記憶に引っ掛かる物は見つからなかった。

あるのは犬か何かが埋めた骨、茸、木の実ぐらいだ。

「はぁ……結局何も見つからないのか……ん？　あれってもしかして……」

俺は諦めて地面に仰向けになった。

そして上を見ると鞄らしきものが枝に引っ掛かっていたのだ。

しかしその枝が高いところにある。

高さをわかりやすく言うなら俺の身長（１７３ｃｍ）の約３倍だ。

「こういう時はどうするか……」

俺は考え込んだ。

自らの３倍の高さにある物を取る方法を見つけるために。

そしてすぐに見つかった。

「……念動力か」

そう、念動力。

念じれば簡単に使える技で、効果はルーミアで実証済み。

ならば使おうじゃないか！

俺は鞄に向かって手を翳して念じた。

（”あの高いところにある鞄を取りたい”）

そう念じると手が緑色に輝き、鞄のふちも輝いた。

そして鞄が枝から外れて俺の元へ来た。

「……思い出せない記憶に関する事があると良いな……」

俺はそう呟き、鞄を開けた。

すると中から何かが飛び出してきた！！

しかしその何かは攻撃するわけではなく、俺に擦り寄ってきた。

「くすぐったいな……ん？　鼬？　って確か…水……姫？」

俺は靄のかかった記憶の一部が晴れるのを感じた。

この鼬は水姫。

俺のペットだ。

以前に怪我していた水姫を保護して、看病したところ……凄く懐かれた。

そんな記憶が蘇った。

しかし水姫はそんな俺を余所に、どこかへと走っていった。

そんな時、俺は一つの案を思いついたのだが……

「ん？　もしかして水姫に聞けば何かわかるんじゃないか？　……まぁ無理か」

あまりにも非現実のため、すぐに諦めた。

そしてほかに何か良い案は無いかと悩んでいた時、

「普通に話せるでございますですよ？　主（ぬし）」

後ろから女性の声が聞こえた。

「え？　誰？」

俺が振り向くと黒髪でポニーテール、変わった和服を着た人がいた。

ついでにかなりのナイスバディと言える。

そしてその女性は驚きの一言を言った。

「私ですよ。私。水姫でございますです」

「み……水姫ぃ！？」

俺はあまりの変わりように大声を出してしまった。

「お前……何があった？」

「何があったって……ただ人間の姿になっただけでござんす」

水姫の敬語……何かおかしいな……。

しかしこの喋り方を聞いていると何故かリラックス出来る。

っと……その前に確認しないとな。

「もしかして水姫って……妖怪だったのか？」

「一応ですけどね。ちなみにこの姿になったのは貴方に初めて会う前以来です」

「妖怪か……特に気にしないけどさ。記憶が戻るまで、サポートを頼む」

「かしこまっちゃいました。主」

そういうわけで水姫が仲間になった。

「うん……特に無いなぁ……」

水姫が仲間になった後、俺は鞄を漁った。

しかし特に良い物は見つからなかった。

残る手がかりは……

「どうかしやがりましたか？主」

水姫だな。

「なぁ、水姫。何か俺に関する情報とか無いか？」

「そうですね……私がわかるのは……許婚がいる事ぐらいです」

「許婚？　……確か名前は……思い出せない……痛っ」

俺は記憶の靄の中を必死になって探した。

姿は見えたが名前が出てこない。

しかも何故か頭痛がした。

どうやら許婚は思い出したくない記憶に関わっているらしいな……。

「なるほどな……。他には何かあるか？」

「……申し訳なかです。私はもう知らんの事ですたい」

「わかった。まぁ記憶の手がかりが見つかったから良いさ」

俺は優しく水姫にむかってそう言った。

「お役に立てたならよかったです」

水姫は笑顔で言った。

俺はこの笑顔を見て、

（これ、絶対美女と呼べる笑顔だな……）

と思った。

だってかなり輝いているんだから。

……おっと、話がずれた。

まぁ手がかりが見つかったわけだし、今日はぐっすりと寝れそうだ。

「さてと、家に帰……あっ」

しかし俺は結構、重大な事に気がついた。

「どうしやがりましたか？」

「俺……家持ってないんだった」

そう。家を持ってない事だ。

思い出せば、初日は永遠亭、二日目は野宿だった。

（どうにかして雨風凌げる場所を探すか作らないと……）

俺は雨風を凌ぐ方法を考え始めた。

すると頭の中の靄の一部が晴れた。

そして方法が導き出された。

「……どうするんですか？」

「よし、水姫。ここら辺の良質な木を切って綺麗な丸太を作ってくれ。数は……三十本ぐらいで頼む」

「……はい。かしこまっちゃいました。『双牙』」

俺は流石に無理かな？と思ったが、水姫は『双牙』と呼ぶ二本の小刀を取りだし、構えた。

「主、離れてて下さい。危ないので」

「あ、あぁ」

俺はそのまま下がり、待機した。

「行きます……『迅雷・時雨の型』」

「っ！？」

一瞬、視界が光に包まれ何も見えなくなった。

そして光が消え、水姫の方を見ると刀をしまっている。

「水姫？　何故刀を……」

俺は疑問をぶつけようとした。

しかし言い終わる前に水姫が

「主、木が倒れて来やがりますよ？しっかりと受けとって下さいね」

と言ったので俺は周りを見た。

すると、ギシギシと音を立てて木々が倒れてきた。

しかも全部、俺に向かって。

「くっ！！　人使い荒いなぁ！！」

俺は手を倒れてくる木々に向かって両手を翳す。

そして念じた。

（俺に向かって倒れてくる木々を止めたい）

すると木々はすべて止まった。

俺はそのまま木々を移動させた。

「やっぱりお見事でしちゃいますな。主は」

「ったく……危ないっての。まぁ……良いさ。これで簡単な家が作れる」

俺は簡易的だが、実用的な（はずの）家を作り始めた。

まぁ、いわゆるログハウスみたいなやつだ。

以前に何故かわからないが作った記憶があった。

本当なら時間をかけて木を乾かさないと駄目なのだが、企業機密の方法を使って作っている。

「水姫。ここをくり抜いてくれ」

「了解でしちゃいます。主」

水姫が器用なおかげで進行速度は速いし……今日はなんとかなりそうだ。

俺はそのまま組み立て始めた。

そして気がつくと夜の帳が下りていた。

「ふぅ……とりあえず完成。中々の出来栄えだ」

水姫は扉を開けて中を確認した。

「部屋までありやがるんですね……まさかの裏口までも……」

「まぁ簡易的だが、問題は無いだろ？」

「あとは夕飯ですね。主は朝と昼を抜いていると思われちゃいますので、さっさと作ります。っていうか、もう出来てます」

水姫は川の方へ走って行った。

「ん？　あぁ、そうか。悪いな……。それより……なんでもう出来てるんだ？」

俺はその後を疑問を持ちながら歩いてついていった。

ちなみに、川は家の目と鼻の先。

ってか家の裏口を開けたら、目の前だ。

人里も近いし、利便性重視だね。

第5話　巫女と魔法使い

「……ん？　……もう朝か……」

俺は窓から差し込む朝日で目が覚めた。

ゆっくりと体を起こし、伸びをする。

「水姫は……河原かな？」

俺は布団を片付けて、家の裏口から外に出た。

外に出て深呼吸をし、山の綺麗な空気を体内に取り込みながら歩いた。

「はぁ……目が覚めたな。あ、水姫だ」

そして河原に着くと水姫は魚を焼いて、飯盒でご飯を炊いていた。

「おはようございますです。主」

「あぁ、おはよう」

お互いに挨拶を交わして、俺は椅子（丸太）の上に座った。

「はい、主。イワナの塩焼きと白米です」

水姫は魚と木の器に盛ったご飯を渡してくれた。

「お、ありがとう。……いただきます」

「召し上がれです」

俺と水姫は朝食を食べ始めた。

「う～ん……どうしようかな……」

「どうかされたのでございますですか？」

「いや、ただ今日の予定を決めてないから悩んでいただけだ」

そう。予定が全くないのだ。

里に行くわけにも行かず、他に行く場所も無いし……

「なら、博麗神社に行くのはどうでしょう？」

「博麗神社？　どんな場所なんだ？」

「人里の向こうの山の上にある神社で、そこには妖怪退治のプロがいるみたいです」

俺はここでちょっとした疑問がうまれた。

「……ってか水姫？　なんで場所とか名称がわかるんだ？」

「……秘密でございます」

笑顔で言われた。

でも気になる。

しかし俺は詮索するのをやめた。

理由は簡単。

世の中には不可侵領域（プライバシー）があるからだ。

踏み込んではいけないところに踏み込んでしまえば、必ずと言っていい程に争いが起こる。

俺はそういう光景を何度も見た気がするから、詮索をあまりしない。

まぁ詮索をあまりしないおかげで争いに巻き込まれにくいんだけど……。

そんなわけで俺は無駄な詮索をしないのだ。

「よし、今日は色々な場所を回ってみよう」

「かしこまっちゃいました。主」

予定決定。

俺は朝食を食べて、支度した。

今、神社へと向かう階段を登っている。
しかしその階段が結構長い。
「はぁ……はぁ……」
俺は息を切らしながら階段を登っていて、
「主。もう少しですから頑張って下さいませ」
水姫は余裕そうに階段を素早く登っていた。
俺は一回止まり、呟いた。
「空でも飛べたら良いなぁ……」
そしたら水姫が提案してきた。
「念で自分を浮かせば良いんじゃないですか？」
「……あ、その手があった」
なんで気づかなかったんだ？俺……。
そんな自分が悲しい……。
「よし、やってみるとするか」

俺は自分が空を飛ぶ事を念じた。
するとゆっくりと綺麗に浮いた。
「おぉ、うまくいったな」
「早く登りきりましょう。主」
「おう。わかった」
俺と水姫は博麗神社目指して、少しながら加速しつつ登った。

「よっ……と。到着か？」
俺は境内に降りて周りを見た。
「そのようでございますですな」

水姫も境内に降り立つ。
境内は綺麗に清掃されていて、中々良い印象を持てた。
（中々平穏そうな場所だな……）
と思ったのはつかの間、
ズガガガガァァァァァ！！
左から巨大なレーザーが飛んできたのだ！！
「ん？　何の音だ……ってうおぉぉ！？」
「おっとっと、一旦下がりますです」
俺は慌てながら、水姫は落ち着いて下がった。
その直後、俺達のいた場所にはクレーターのような跡が残っていた。
「危ねぇ……いったい何なんだよ……」
「主。あちらの方で何か騒がしいのです。行ってみましょう」
水姫が神社の横を指さした。
そこを見ると何か戦っているような光が見えた。
「あぁ、行ってみよう」

何が起きているかが気になったのでこっそりと覗きに行った。

「こら！！　魔理沙！！　神社を壊さないでよね！！」

「いやぁ、悪い悪い。少し手が滑っちまったぜ」

俺と水姫が覗くと、黒と白の服をきた魔法使いらしき姿をした少女と、腋を露出した紅白巫女がいた。

「全く……狙うならしっかりと狙って撃ちなさいよね……」

「ははは。良くある事だ。気にしない、気にしない」

二人の少女は楽しそうな会話をしている。

しかし俺は考えていた。

あの魔理沙と呼ばれる魔法使い少女の事である。

（あんな少女がさっきのレーザーを放てるのか？　いや、しかし……）

そんな時、水姫が話しかけてきた。

「あの方々はいったい何をしちゃっているのでしょうか？」

「さぁ？　俺に聞くなよ……」

俺達は静かに会話していたのだが……

「そこにいる妖怪二人組！！　出てきなさい！」

「いや、霊夢。多分片方は魔法使いじゃないか？　かなり膨大な魔力を感じるぜ？」

何故かわからないがばれた。

「どうしまするのか？　主。出ますか？」

「……仕方あるまい。潔く姿を現すとしよう」

俺と水姫は恐る恐る二人の前に姿を現した。

「人の話を盗み聞きするなんて良い度胸してるわね……」

「そうだぜ。それなりの覚悟があるんだよな？」

何か武器を構えて覚悟があるか聞かれてる。

「いや、覚悟も何も無い」

「その通りでござんす」

俺と水姫はとりあえず正直に答え、武器を取り出した。

「でもやる気はあるようね」

「まぁ実力を見せて貰うとするぜ！！」

「水姫、前に出てくれ。援護する」

「かしこまっちゃいました」

こうして二人の少女との戦いが始まった。

しかしこの戦いは俺が予想も出来ないような戦いだった。

「いざ尋常に勝負！！」

俺と水姫は武器を構えて、魔法使い少女を狙った。

「先手必勝だぜ！！　恋符『マスタースパーク』！！」

魔理沙と呼ばれる少女は紙のような物を構えた後、箱のような物を構えた。

するとその何かから極太レーザーが放たれた。

「危なっ！？」

「はぁっ！！」

俺と水姫はそのレーザーを避けた。

「ったく……あの武装は危険だな……」

「どうします？　主。対策方法とかありませんと……」

「ほら！相談する暇なんて無いわよ？霊符『夢想封印』！！」

今度は霊夢と呼ばれる少女が紙を構えて、巨大な弾を数発撃ってきた。

しかもその弾には強い追尾機能がある。

俺は身構えたが、また頭痛がした。

しかし今回の頭痛はいつもと違った。

「痛っ……何か頭の中に情報が入ってきた……」

「え？　と、とりあえず避けましょうよ？主！」

「仕方ない……水姫！！」

「はい！！」

俺と水姫は避けずに相手に突っ込んだ。

その俺達を追うように弾が追ってくる。

「なんだろうな……戦いが頭の中で構築されてる……。水姫、そこで加速だ」

「はい。加速しちゃいます！！」

水姫は残像が出来るぐらいの速さで突っ込んだ。

この残像は特殊な質量を持ち、追尾機能を持つ攻撃は本体に追尾せ

ずに質量を持った残像を追尾してしまう。

まぁわかりやすく言うならＦ９１のＭ．Ｅ．Ｐ．Ｅ．だ。

「夢想封印が当たらない！？」

「お～、中々の速さだな。しかしスピードなら負けないぜ！！」

「おっと、俺を忘れて貰っては困るな。……加速！！」

ちなみに俺の加速はただの加速だ。

俺は高速移動で魔法少女に突っ込んだ。

第6話　少女達との戦い

「返り討ちにしてやるぜ！！魔符『スターダストレヴァリエ』！！」

少女は箒に乗って突っ込んできた。

「少し誤差はあるが、問題無いな……。『瞬間移動（テレポート）』」

俺は瞬間移動で攻撃を避けた。

「ど、どこに行ったんだぜ？」

俺は少女の後ろに立ち、肩を叩いた。

「後ろだよ。後ろ」

「このぉ！！　恋符……」

少女はまた箱のような物を構えた。

しかし俺はその前に少し話した。

「あ、そうそう。忘れてると思うけど、夢想封印は俺を追っている。そして君は俺の近くいる……これがどういう意味か分かるか？」

「ん……ま、まさか！？」

少女がそう言った時には、周りに夢想封印の弾があった。

そして弾が接近してきて、俺達を包み込んだ。
しかし俺は相打ちになるつもりは全く無い。
何故なら回避方法があるからである。
さっき弾が水姫の残像に当たって爆発していた光景を見て、思いついた方法だ。
その方法とは……
「じゃあな。『瞬間移動』！！」
そう、瞬間移動で爆発寸前に脱出するのだ。
「なっ！？　うわぁぁぁぁ！？」
バァァァァン！！
夢想封印の弾は爆発した。
しかし巻き込まれたのは少女のみ。
これはいわゆる誤射というやつだ。
「ふぅ……うまくいったな。残るは……巫女さんか」
「よっと、流石ですな。主」
水姫が戻ってきた。

「まさか魔理沙がこんなに早くやられるなんて……」

ドサッ！

霊夢と呼ばれる少女がそう呟いた時に、魔法少女が落ちてきた。

「痛たた……負けちまったぜ……」

少女の服は結構ボロボロだ。

「魔理沙……もっとしっかりしなさいよね」

「今日は良いとこ無しだな……」

少女達は会話していた。

「さてと水姫。……巫女はどうだった？」

「手合わせしたのですが……かなり強いです」

「そうか……なら楽しめそうだな」

「主……なんか……さっきとキャラ変わってませんか？」

水姫にそんな事を言われた。

「ん？　そうか？　俺には分からないんだが……まぁ、この話は後だ。今は、戦いに集中しろ」

「かしこまっちゃいました」

まぁ話もそこそこにして武器を構えた。

すると巫女さんは札を構えて、俺に問い掛けた。

「ったく……貴方達は一体何者なの？」

「……自分でも分からない」

「へ？　どういう事？」

「……まぁそれは後で語るとしよう。……水姫、下がって魔法少女の怪我を治しておいてくれ」

「……了解です」

水姫は後ろに下がり、魔法少女を治療にいった。

ちなみに俺が水姫の治療能力を知っていた理由は、自分でもわからない。

多分記憶の中にあったんだと思う。

本当に……中途半端な記憶喪失だな……。

「とりあえず……勝負を始めるわよ？」

「あぁ、そのつもりだ」

俺がそう返答した途端、巫女さんは札を投げてきた。
俺はその中を避けながら接近して槍を取り出し、振りかぶった。
ガァン！！
巫女さんの棒と俺の槍の柄がぶつかりあう。
それを数回繰り返した。
「中々やるわね。でも……」
「巫女さんもな。でも……」
「「そろそろ決着をつける！！」」
そしてお互いに言い放った後、距離を取って力を溜めて同時に技を仕掛けた。
しかし俺の場合は攻撃では無いけど……。
「『瞬間移動』」
「霊符『夢想封印』！！」
俺はかなり上空に現れた。
そんな俺を追うように夢想封印が飛んでくる。
「さてと……久々にあの技をやるとしようか」

俺はまた自分でも分からない事を言った。

なんだか自分が分からなくなってきた気が……。

「究ぅぅ極ぅぅ！！　ゲシュペンストォォォォ！！」

「え！？　急に何！？」

巫女さんは戸惑っていた。

まぁ急に叫んだからだと思う。

そんな事は放置して、また叫んだ。

「キィィィィィック！！」

蹴りの構えで俺は巫女さんに向かって落下した。

重力に引かれて徐々に加速していく。

落下していく中で脚の先端に特殊な障壁（バリア）が展開された。

どうやら今の俺が知らないシステムがあるようだ。

記憶喪失って本当にわかんないなぁ……。

おっと話がずれた。

俺の蹴りは巫女さんに向かっているのだが、その途中には夢想封印

の弾が数発壁になっている。

「自分からやられるつもりなの！？」

「そんなつもりは無い。……さぁ……貫くとしようか！！」

夢想封印の弾に脚が衝突した。

パァァァン！！

すると蹴りは弾を打ち砕き、俺は突き進んだ。

それを夢想封印を全弾貫く。

「そんな！？　夢想封印が！？」

「……これで決まりだぁ！！」

俺はさらに加速して巫女さんへと向かう。

ドガァァァァ！！

「くぅっ！？」

そして巫女さんを貫いた。

「どんな壁も……蹴り破るのみ……」

なんか決め台詞のようなものを言ってしまった。

なんか癖なのかな？

「ふぅ……疲れた……」

「痛い……貴方、本当に強いわね……」

「今の俺はまだ完全じゃないけどな……水姫。そっちは終わったか？」

「はい、完全に終わっておりますたい」

「それじゃ、巫女さんの方も頼む」

「かしこまっちゃいました」

俺は水姫に巫女さんの治療を任せた。

「あ、待って」

しかし巫女さんに呼び止められた。

「何だ？」

「自己紹介がまだだったわね。私は博麗　霊夢。貴方は？」

「風戸　響介。多分人間。今は記憶喪失中だ」

「私は水姫。妖怪です」

「私は霧雨　魔理沙だぜ」

自己紹介を済ませたので俺は縁側に座った。
俺の隣に霊夢が座り、その隣には水姫、そしてさらにその隣に魔理沙が座った。
「さてと……霊夢。一つ聞いていいか？」
「何？」
「さっきの紙って何だ？」
「え？　スペルカードを知らないの？」
どうやらさっきの紙はスペルカードと言うらしい。
あ、知らない理由を言わないとな。
「だって分からないも何も……」
「つい最近、幻想郷に来たんだもの。知らなくて当然よ」
俺は理由を説明しようとしたら聞き覚えのある声が聞こえた。
ってか台詞取られた。
俺が振り向いたら、人里で会った紫さんが座っていた。
「ゆ、紫さん！？」

「人里以来ね。元気だった？」

「まぁ色々ありましたけどね。……ってか敬語疲れる……」

「別に普段通りで構わないわよ？」

「あぁ、なんか悪いな。我が儘聞いて貰って」

「大丈夫よ。気にしないで良いわ」

そんな感じで会話していると霊夢が話に乱入してきた。

「って響介。紫を知ってるの？」

「いや、人里で色々と世話になってさ。力が何とかって」

「……あの紫殿は妖怪でござんすか？」

水姫が紫に尋ねた。

「えぇ。そうよ」

俺はこんな美人さんが妖怪だとは思わなかった。

世の中って意外と面白いよな……。

「紫もスペルカードを持ってるのか？」

「えぇ、もちろん持ってるわ」

紫はスペルカードを取り出した。

「スペルカードについて説明してもらってもいいか？」

「構わないわよ。しっかりと聞きなさいね？」

「おぅ。わかった。……水姫もな」

「了解でありんす」

俺と水姫は紫や霊夢に説明して貰った。

弾幕ごっこやスペルカード、弾幕の出し方、そして幻想郷とは何か……。

それらを聞いて俺は、

「色々と複雑なんだなぁ……」

と思った。

第7話　霊・妖・魔・神

「説明はこれぐらいだけど、質問はあるかしら？」

と紫が扇子を持ちながら言った。

「無い」

「無いです」

俺と水姫は一言で返事を済ませた。

「……俺からも以前話せなかった事を話すとしよう。紫なら覚えているだろう？」

「えぇ。もちろんよ」

「それじゃあ一言で済ませるとしよう。俺は……人間でも妖怪でもない」

「え！？」

「ん？　どういう事だ？」

「いや、聞いた通りでしょ」

水姫を除いて紫は驚き、魔理沙は理解出来ず、霊夢は突っ込んでいた。

まぁさっき紫の説明だと幻想郷にいるのは”人間””妖怪””妖精””魔法使い””天人”……色々らしい。

しかし俺の記憶にはどの言葉もピンと来なかった。

”化け物”の方がピンと来る……。

全く……俺は何なんだろうね？

「そしてもう一つ。霊力についてだが……多分、俺が霊力を持つ何かを取り込んでるんだと思う」

「取り込んだ？　一体何を？」

霊夢が尋ねてきた。

「……まだそこはわからない。しかし何かを取り込んだのは事実だ」

「でも……取り込むってどうやって？」

「ん～……食べた？　……いや、”助けるために食べた”の方が正解かな？」

「助けたってどういう……」

「それは色々と思い出してからだな。まだ不確定な事が多いし……」

俺は話を打ち切った。

これ以上は、話してもわからないからな。

「……わかったわ。色々と調べるのに使わせてもらうわね」

「あぁ、了……え？　調べるって何を？」

危うく了解しかけた……。

「貴方の事よ。一応、妖怪達の味方か、否かをね」

「……それなら構わない。もし敵だとしても幻想郷（ここ）の妖怪には手を出さないだろう。多分」

「多分って……随分と曖昧ね」

「記憶回復とその後の俺次第だからな。未来は分からないのさ」

「まぁ敵対したら私達が吹き飛ばしてやるから安心するんだぜ！！」

「いや、安心出来ないよ！？」

「全くです。いざとなれば私が主を……」

「やめて！？」

俺達はこの後も楽しく会話していた。

時を経つのも忘れて。

気がつくと空はあかね色に染まっていた。
「そろそろ私は帰るとするぜ」
魔理沙は箒に乗り、浮いた。
「あぁ、またな」
「おぅ！！　次戦う時は負けないからな！！　覚悟するんだぜ！！」
「まぁ、その時にはスペルを完成させて今より強いだろうな」
「ははっ。楽しみにしてるさ！！　……んじゃ、またな！！」
「じゃあな」
魔理沙は箒に乗り、物凄いスピードで飛んでいった。
「主、そろそろ……」
「あぁ、帰るとするか」
「また来なさいよ。どうせ暇だし」

「わかった」

「あ、そうそう。響介、もう人里に入れるようにしたから活用すると良いわ」

「了解した。これで自給自足の生活が楽になる……でも金が無い」

せっかく人里に入れるようになったのに買うお金が無いって……悲しいな。

しかし紫はとある策を教えてくれた。

「……人里とかで仕事の手伝いでもして稼ぎなさい」

「まぁ水姫と頑張るさ。……それじゃ、またな」

「失礼致しちゃいます」

「えぇ、またね」

「ごきげんよう」

「『瞬間移動』」

俺と水姫は家へと瞬間移動した。

俺達は自宅の目の前に出現した。

「さてと……明日は色々と大変だな……」

「記憶探しと仕事探しでございますよね？」

「あぁ。とりあえず俺と明日人里に向かう。可能なら水姫もついて来てくれないか？」

「えぇ。私は構いません」

「よし。なら今日は早く寝て明日に備えよう」

俺と水姫は保存していた野菜と釣った魚で夕飯を済ませて、眠りについた。

「……ん？　ここは？」

気がつくと俺は謎の空間にいた。

先が見えない程に広くて白い世界。

足元には俺が大の字になって寝れるぐらいの床がある。

そして後ろを見ると丸くて光る物が４つ、並んで浮いていた。

「なんだろ……これ」

４つの塊はそれぞれ別々の色を放っていて、その光は見る者を引き付ける。

塊の光の色は赤、紫、青、白だった。

その時！！

カッ！！

「ま、眩しっ！！」

塊は急に輝きだして、形状が変化していく。

紫の塊は銀の狼に、青い塊は黒い龍に、赤い塊は白い天使に、白い塊は赤い鳳凰の姿になった。

そして狼が喋りだした。

「……また会ったな」

聞き覚えのある声だった。

ルーミアに襲われた時に助けてくれた声だ。

「お前……もしかして銀狼？」

「あぁ、そうだ。儂は銀狼。お主の妖力の源なり」

「これが俺を拾った奴か……中々な力がありそうだ」

その隣の黒い龍は俺を見ている。

龍と言っても蛇みたいな体じゃなくてレッ〇アイズ・ブ〇ックドラ〇ンみたいな感じだ。

「で、黒い龍の名前は？」

「俺の名前は黒龍（こくりゅう）。お前の魔力の源だ」

（名前って……そのままなんだね……）

俺はそんな事を考えた後、黒龍の隣に視線を向ける。

そこには白くて大きな羽、金髪ロングヘアー、我が儘ボディの女性がいた。

「で、さらに隣の人は？」

「はいは～い！！　私の名前は天星（あまほし）！！　貴方の霊力の源は私よ！！」

元気な印象を与える天使だった。

「確か……取り込んだんだよな」

「そうよ。消えかけてた私を助ける為に貴方は私を取り込んだの」

「あぁ……そんな感じの記憶があるような……」

一部分の靄が少しずつ晴れていくのを感じた。

「で、鳳凰は一体何？」

これは……一目瞭然だと思う。

「我は鳳凰……まだ力は解き放っていないが、お前の神力の源だ」

「……っていう事は……神様なのか？」

「そういう事だ」

正直俺は驚いた。

まさか神様まで取り込んでたなんて……。

「なんか俺って色々と取り込んでるみたいだな……」

「でも～……気にしなくて良いんじゃない？」

天星が笑顔で言った。

畜生、天星。

笑顔が兵器じゃないか……。

「……しかし何故俺はここに？」

「うむ。簡単に言うならお主の取り込んだ力を再度認識してほしかったのだ」

銀狼が説明した。

「まぁ神様を取り込んでるのは驚いたもんなぁ……」

「そしてもう一つ。我の力を解放する報告だ」

「力を……解放する？　それって一体……」

俺が質問しようとした時、銀狼が何かを察知したように喋った。

「む……そろそろ時間のようだ」

「え？　時間って？」

「貴方が起きる時間って事よ」

「何？　もう朝なのか？」

「そういう事になる」

黒龍が答えた後、鳳凰が別れの言葉を言った。

そして銀狼、黒龍、天星はそれに続くように言った。

「それでは響介よ……頑張れ」

「儂達はいつでもお主の中にいる」

「……強くなれ」

「それじゃあ、まったね～！！」

それぞれが言いたい事を言ったら、目の前が光に包まれた。

目を開くと家の天井があった。

「夢？　……違うか」

「おはようございましたりしまする。主」

水姫が布団の横に来た。

「あぁ、おはよう」

「ちなみにもうすぐ朝食です」

水姫は立ち上がり、家の裏口から出ていった。

「……さてと、今日一日頑張るとしますか！！」

俺は布団から出て、伸びをしてから水姫の後を追った。

第8話　人里での一日

朝食を食べて、冷たい水で顔を洗い、目を冷ました俺は今、人里に向かって歩いている。

「人里か……あの時以来だな」

「おや？　人里に行った事があるご様子で」

「ん？　入ってはいない。外から見ただけだ」

「なるほど……で中の様子は？」

「人々に活気があり賑やかだった。……外の世界より良いぐらいな」

「楽しみですね」

俺は水姫と会話しながら人里へと向かった。

人里に着くと俺は周りを見渡した。
理由はどんな店があるのか気になったからだ。
それともう一つ。
以前、人里の前に居た女性がいるかを確認したかった。
あの人なら人里に詳しそうだしな。
「まぁ大通りを進めば見つかるだろうな」
「それにしても賑やかですね。ここは」
「あぁ、とても楽しそうだ」
大通りは店で商品を売る声、買う者の声、笑い声等……色々と賑わっていた。
外の世界だと、こういう光景は中々見れない。
そんな活気の中で俺は考え込んだ。
「さて、どうするか……」
「どうしたんですか？　主」
「いや、人里に詳しい人がいたら楽だなって……」
「ん？　君はあの時の……」

水姫に説明しようとしたら聞いた事のある女性の声が聞こえた。

「あ、居た。人里に詳しい人」

「名前で呼ばな……あぁ自己紹介して無かったな。私は上白沢　慧音。この里で教師をしている」

「俺は風戸　響介」

「私は水姫です」

自己紹介を簡単に済ませて、本題に入る事にした。

まぁ水姫に喋らせるけど。

「あの、慧音殿に頼みがありんして……」

「ん？　なんだ？」

「人里を案内して欲しいのでござんす」

「任せてくれ。しっかりと案内してやろう」

よし、これで大丈夫だな。

一応保険もかけておこう。

「……水姫」

「はい。なんでしょう？　主」

「店の場所とかをメモしておけ」

「かしこまっちゃいました」

（これで安心だな。）

俺は水姫に色々と任せて、ゆったりとついていく事にした。

「それじゃあついて来てくれ」

「おう」

「了解しちゃいました」

俺達は慧音さんについて行った。

ちなみに慧音さんは水姫が気になっていたらしく色々と聞かれた。

全ての案内が終わり、今は茶屋で休憩中だ。

「いやぁここは賑やかで良いなぁ～」

「同感です」

「ここを気に入ってもらえて嬉しいよ」

みんなで団子を食べながら会話する。

すると向こうから子供達が走ってきた。

「「「慧音せんせ～い！！」」」

「おぉ、お前達か」

慧音さんは子供達に手を振る。

「生徒さんですか？」

「あぁ、元気な教え子だ」

子供達は近づいてくると俺と水姫が気になったらしく直球（ストレート）に質問してきた。

「あれ？　お兄さん達誰？」

「ん？　俺か？　俺は風戸　響介だ。よろしくな」
「私は水姫です。よろしくお願いしますね」
あれ？水姫が普通に敬語が喋れてる？
何故？
「それでお兄さん達は何しに来たの？」
「私達、遠いところから引っ越して来たんです」
「それで慧音さんにここの案内して貰ってたんだ」
正直、水姫のは嘘に近いが……問題無いだろうな。
しかし……喋り方でここまで雰囲気変わるのか……。
「慧音先生って良い人でしょ～？」
「えぇ、とても良い人です」
「こんな人が先生だなんてうらやましいな～」
「「「へへへ～」」」
子供達は笑顔だ。
なんかこういうのを見ると和むなぁ……。

そんな時、俺は面白い事を思いついた。

「あ、そうだ。ここで会ったも何かの縁。一つ面白い物を見せてやろう」

「「「え？　何々？」」」

「水姫。何か球とか無いか？」

「ありますよ。確か……小さめの鞠が一つ」

「何で持ってるんだよ……まぁ良いや」

俺は突っ込みを入れつつ、鞠を受け取る。

鞠の大きさはバレーボールくらいだ。

「それと桶無いかな？」

「ならこれを使うかい？」

「ありがとうございます。少しだけお借りしますね」

茶屋のおばあちゃんが貸してくれた。

この桶はバケツみたいな感じだった。

ただし持ち手はついてない。

「さて……この鞠と桶を使って手品をしようと思う」

「ねぇ、どんな手品なの？」

「見てれば分かるよ。まずは桶の中に鞠を入れるんだ」

子供達は目を輝かせて見ている。

「そしてこの桶に布を被せる。……そうだな。そこの少年、この桶を持っててくれないか？」

「え？　うん、わかった」

俺は少年に桶を持たせた。

「君達で布を押さえててくれ。力強く、でも布が破けない程度にな」

「「えいっ！！」」

子供達は頑張って布を押さえている。

「それじゃあ……3・2・1・0！！」

俺は1と数えた時に左手を翳した。

そして0と数えたら右手の指を鳴らす。

「さぁ、その布を退けてごらん？」

「うん……あれ？鞠が無い！？」

「どうだ！！　これが”瞬間移動”だ！！」

この台詞を聞いたら分かるだろう。

もちろんタネもな。

子供達は「どうやったの！？」とか「スゲー！！」とか言っていた。

どうやら喜んでくれたようだ。

いや～和むなぁ～。

「あ、ちなみに鞠を出す事も出来るよ？」

「「「出して出して～！！」」」

「んじゃ出しますか」

俺は子供達の期待に応えるため、鞠を出す事にした。

「それじゃあ、まずは桶を裏返して地面に置く」

「「「うんうん」」」

「そして君達が上から押さえる」

子供達は桶を押さえた。

「それじゃあ行くよ。３・２・１・０！！」

また左手を翳して、右手の指を鳴らした。

「さぁ桶をどけると良い」

子供達は桶をどけた。

するとそこには鞠があった。

「「「スゲー！！」」」

子供達は凄く喜んでくれたようだ。

「「「それじゃあまたね～！」」」

「またな～」

そして子供達は帰っていった。

「響介……君は凄いな。あんな手品が出来るなんて……」

「俺からしたらかなり簡単ですよ？　技を使っただけですし」

「まぁ……そうですよね。手品の名前を言った時点でわかってました」

「ん？　話の内容が掴めないんだが……」

「俺は瞬間移動って技があって……」

この後、技の説明からタネ明かしまでを人里の出口に向かいながら説明した。

「どうです？　わかりました？」

「あぁ、理解したよ。しかし興味深い……」

慧音さんは何か考え込んでいた。

「あ、もう出口か」

「そうですね……あ、主。あの件について聞いた方が……」

「そうだな。……慧音さん。一つ良いですか？」

「ん？　なんだ？」

「ここでバイトとか無いですか？」

「どうした？　いきなりバイトなんて……」

まぁ普通、そういう反応だよな。

「いや、こっちの通貨とかを持って無いから稼ごうかと……」

「なるほどな……わかった。探しておこう」

「そうしてくれるとありがたいです」

よし、これでお金はしばらくすれば大丈夫だな。

とりあえずしばらくは何とか魚とか山菜を食べて過ごすか。

「それじゃあ俺達は帰ります」

「あぁ、わかった。それじゃあ、またな」

「失礼致しちゃいます」

俺と水姫は人里から出て、家に向かって歩きだした。

第9話　青年の悩み事？

歩いてる内に夜の帳が下りてきてしまった。

「少し急ぐか……」

「そうですな」

俺は歩く速度を速めた。

そんな時、草の茂みの中から何かが飛んできた。

「危なっ！！」

俺はとっさに神槍を出して、飛んできた物を弾いた。

「主、大丈夫ですか？」

「あぁ、しかし今のは一体……？」

そんな事を言ってるとまた何かが飛んできた。

「はぁっ！！」

今度は水姫が防いだ。

そして俺は槍を構えて、茂みに向かって言った。

「さて、姿を見せて貰おうか」

「……また会ったわね」
茂みから出てきたのはルーミアだった。
それともう一人。
「この人なの？　ルーミア」
「誰だ？」
「私はミスティア・ローレライ。ルーミアの友達よ」
「へぇ……よろしくな」
とりあえずいつも通りに振る舞った。
「主、知り合いですか？」
「お前と会う前、金髪少女の方に喰われそうになった」
「……主を襲うなんて不届き千万！！　成敗してくれます！！」
なんかやる気出してるよ……この子。
「で、戦うつもりなのか？」
「えぇ、もちろん。あの時の復讐をするわ」
「貴方を闇の恐怖に取り込んでるあげる！！」

二人ともやる気だな。
なら俺も参加するとしようか。
「格闘戦をしようか」
「別に構わないわ」
「私も」
「主に従うのみです」
決定だな。
「水姫、守りからスキをつくぞ」
「かしこまっちゃいました。主」
「ミスティ。あれをやるわよ」
「うん、わかったわ」
弾幕ごっこが始まった。
「さぁ、闇に飲み込まれるが良いわ！！」
ルーミアが闇を作りだし、俺達を飲み込んだ。
そして格闘を仕掛けてきた。

「目が慣れれば見えるはず……」

「それまで耐えましょう」

俺と水姫は格闘の直撃を避けながら、耐えた。

そして闇に目が慣れてきた。

「よし、これで何とかなる」

「そんなに甘くないわよ！！」

ミスティアがそう言った瞬間、慣れていた目が見えなくなってしまった。

正確に言えば、微かに見えていた光が見えなくなってしまったのだ。

「また見えなくなった……」

「何なんでやがるか！！」

俺達がそんな事を言っているとミスティアとルーミアの声が聞こえた。

「私は人を鳥目に出来るの」

「そしてこれが私達のコンビネーションよ！！」

このルーミアの台詞と同時にまた攻撃が始まった。

「クッ！！」

「きゃっ！！」

闇の中で爪のような斬撃が舞う。

俺達はしばらくの間、闇に翻弄されて何も出来ずにいた。

一時的に攻撃が止んだ。

「はぁ……はぁ……。水姫、無事か？」

「えぇ、……主こそ大丈夫ですか？」

「意外と……マズイかもな」

俺はここで打開策を探すため考え込んだ。

「水姫。お前って力を感知する事って出来るか？」
「まだ完全に感知出来るわけではありませんが……」
「周囲２０ｍ以内ならどのくらい精度が上がる？」
「大体……素早い動きの物体を３個捕らえるくらいですな」
「それぐらい出来れば充分だ。良いか？　まず……」
俺は水姫に耳打ちした。
打開策を伝えるために。
「出来るな？」
「もちろんでございますです」
「よし、ならば背中合わせで行くぞ」
「かしこまっちゃいました」
俺と水姫は背中を合わせた。
「どんなに策を練ったところで……」
「私達に勝てるわけがない！！」
闇の何処かからか声が聞こえてきた。

「……水姫」

「はい、３と７……４と８……５と９……」

「『サイキック・インパクト・ブラスター』」

俺は技の構えをした。

例えるならか〇はめ波みたいな構えだ。

しかし放つ訳では無い。

しっかりと狙わないと駄目だからな。

「７と１１……８と１２……」

水姫のタイミングに合わせる。

そしてその時が来た。

「１１と３！！」

「発射ぁぁぁ！！」

俺は真っ正面に極太ビームを放った。

「きゃあぁぁ！！」

誰かに当たったようだ。

声からしてミスティアだ。

「水姫！！」

「かしこまっちゃいました！！　『迅雷・時雨の型』！！」

水姫は双牙を取り出し、周囲２０ｍ以内を切り裂いた。

「くっ！！」

「きゃあ！！」

今度は二人当たったようだ。

まぁ避けるにしても、『迅雷・時雨の型』は斬撃速度が速いから避けにくいんだよな。

「お、闇が消えた」

「作戦成功でござんすな」

「やっぱり強い……！！」

「ここまでやられるなんて……！！」

ルーミアとミスティアは損傷を負いつつも戦闘態勢だ。

「もうやめておけ。もう傷付けたくない」

俺はそう言って、戦いを止めようとした。
しかし、
「せめて一太刀！！」
とルーミアが斬りかかってきた。
「はぁ……”せめて一太刀”ねぇ……」
俺はルーミアの剣を槍で受け止めた。
そして弾き飛ばした。
「くぅっ！！」
ズザァァ！！
「ルーミア！！」
ミスティアがルーミアに駆け寄った。
「水姫、二人を治療してやってくれ」
「よろしいのですか？」
「構わない。怪我を治してやってくれ」
「かしこまっちゃいました」

水姫は二人に駆け寄り、治療した。

「……水姫に頼ってばかりだな……強くなりたい……」

俺は夜空を見ながら呟いた。

正直、頼るのは良い事だと思う。

しかし俺には抵抗がある。

抵抗がある理由は頼る事に恐怖があるからだ。

頼り過ぎて、誰かの足を引っ張るのが怖い。

頼るばかりで自分が弱体化しそうで怖い。

そしていつか、俺はいらない存在になってしまうのが怖いのだ。

だから余り頼るような事はしたくない。

「主、治療が終わりました」

「……あぁ、ありがとう」

「どうかしやがりましたか？元気が無いようでございますですが……」

「いや、なんでもない」

「？　……それなら良いのですが……」

水姫には情けない姿を見せられない。
情けない姿を見せたら、俺のところから離れていくかもしれない……。

「……帰るか。腹減ったし……」

「かしこまっちゃいました。主」

「また……会いましょう」

「今度は負けないからね！！」

俺と水姫はルーミア&ミスティアと別れて自宅に向かった。

家に着いた頃には星がくっきり見えるぐらいになっていた。

「さてと夕飯はどうするかな？」

「山菜ならありますたい。あとお米も」

「なら、今日はそれで乗り切るとするか」
「あと少しの辛抱でございますからな」
とりあえず夕飯決定。
「よし、作ってきてくれ」
「かしこまっちゃいました」
水姫は川へ向かった。
俺は一回、家の中に入った。
そして床に座り、考える。
（力を察知する技か……どうやるんだろ……）
まぁ考える内容は水姫が使った技だったりする。
力を察知することが出来れば、強い相手に気づかれる前に逃げる事が出来る。
（水姫にやり方でも教えてもらうか）
俺は水姫に頼る事にした。
抵抗はあるが、自らが強くなるなら我慢する。
そして……自分だけでは無く、仲間を守れるようになる為だ。

（絶対に……家族は守るんだ）

そんな決心を俺は固めた。

するとナイスタイミングで水姫が

「夕飯出来ましたでございますで～す！！」

と言ったのが聞こえた。

「腹ごしらえして今日は寝るとしよう」

俺は河原へ向かった。

第１０話　習得と旅立ち

夕飯を食べ、家に戻って寝るしたくをしている。

「……なぁ水姫」

「なんでございますですか？」

「あの力を察知する技ってどうやるんだ？」

「それはですね……言葉にするのが難しいので説明が出来ません」

「ん～……なら音にしてみて？」

俺は少しふざけた質問をした。

すると水姫は真面目（？）に答えた。

「シュピーン！！　……ですかね？」

「シュピーン！！　……かぁ」

なんかシュピーン！！とか聞くと昔見た機動〇士ガ〇ダムのニ〇ータイプの音と時々聞き間違える。

「俺にニュータ〇プになれと？」

「そんな事は言ってないです」

「……まぁ頑張って習得するとするさ」
「練習というか素質の方が重要かと」
「どういう事だ？」
「私は物心がついた時には出来てましたし……」
「妖怪になれたら出来るのか？」
「恐らく」
妖怪になる……って無理があるよなぁ……
（いや、そうでもない。儂の力を使えば妖獣化が可能だ）
頭の中で銀狼の声が聞こえた。
（え？　そうなの？）
（あぁ、ただし妖獣化している間は妖力と念動力しか使えない）
（ん～……まぁ妖獣化してる時は戦うのを避けるさ）
（妖獣化したい時は儂の名前を言えば良い）
（わかった）
「主？　どうかされましたか？」

「いや、なんでもない。……妖怪になれるかな？　”銀狼”」

俺は銀狼の名前を言った。

すると姿がみるみる変化していく。

まぁ”みるみる”って言っても、一瞬だけど。

「え？　ぬ、主！？」

水姫が驚いているが、余り気にしない。

「ふぅ……これで妖怪になれたな」

「主……一体どんな特技でやがりますか……」

「まぁ秘密というやつさ」

「……でも多分これで探知出来るはずです」

「あぁ……ん？」

俺は”妖力はどこかな～？”という気持ちで探知を始めた。

すると頭の中に光が走った。

「……人里の方向に妖怪の反応が３つ……」

「正解です。どうやら探知出来たみたいですな」

「あぁ、こんな感じなんだな。問題は元の姿で出来るかどうか……」

俺は人間の姿に戻った。

直後に水姫が欠伸した。

「ふわぁ～……んにゃ……主～。もう寝て、明日やりましょう？」

「ん？　……あぁ、わかった。……おやすみ」

「おやすみなさいでございますです」

俺と水姫は布団に入り、眠りについた。

目覚めると朝日が顔に当たっていた。

「ま、眩しい……」

俺は布団から出た。

すると外から水姫の声が聞こえた。

「覇ぁっ！！」

どうやら修練をしているようだ。

「少し様子を見るとするか……」

俺は水姫の様子を見るために、”水姫を透視したい”と念じた。

すると壁が透けて水姫の姿が見えた。

双牙を持ち、木の棒に藁を巻いた訓練具を相手に格闘している。

「せいっ！！　はぁぁぁ！！」

蹴りを放ち、怒涛の連続攻撃をしていた。

「水姫……頑張ってるな」

俺はその姿を見て、努力する決心がついた。

別に迷っていた訳では無い。

ただ、さっきより強く決心出来た。

その決心は揺らぐかもしれないが、崩れることは無いだろう。
俺はその確信を持ち、少し努力する。
「さて……まずは昨日の感覚を思い出しながらやってみるか」
俺は目をつぶり、集中した。
そして力の探知を試みた。
するとあの時と同じ、頭の中に光が走った。
「妖、３……霊、２……魔、２……神、０」
周囲５０Ｍを探索したらこの結果だった。
ってかもう出来るようになっちゃったよ……。
「……腹ごしらえしてからまた挑戦だな」
完成したのに挑戦する理由は簡単。
精度を上げるためだ。
精度が悪いと意味が無いからな。
精度を上げて、対処出来るようにするのさ。
「あ、主。おはようございます。起きていやがったんですか」

水姫がやってきた。

「ついさっき起きたばかりだ」

「もしかして……もしかしなくても声聞いちゃってましたか？」

「あぁ、聞いていた。随分と頑張ってたな」

「しかし……まだ反省してばかりです」

「反省するのが駄目なのか？　反省すれば次に繋がるんだよ？」

水姫は何か言おうとした。

しかし俺は水姫の口に人差し指を縦にして向けた。

「大体、反省する事が無い人生なんて面白みが無い。反省する方が生き物は成長するしな」

「……」

「今は反省、反省、また反省だ。そうすれば遠くない未来、役に立つ」

俺はここまで言うと水姫は考え込んだ。

そして笑顔で俺を見てこう言った。

「……そうですよね。ありがとうございます！！　おかげで元気が出ちゃいました！！」

「あぁ、どういたしまして。……ところで水姫？」

「はい？」

「……凄く腹減った……」

バタリ

俺は仰向けに倒れた。

「ぬ、主ぃ！？　い、今から素早く作りますので耐えて下さいぃ！！」

「た、たのむ……」

（せめてかっこよく決めたかった……）

そんな事を考えていた。

余裕と思うかもしれない。

しかし俺はそのまま料理が出来るまで一歩も動く事が出来なかった。

「ふぅ……生き返った……」

俺は危うく冥界へ行きかけたが水姫がその前に食べ物を口に放り込んでくれたおかげで無事に戻ってこれた。

「ま、間に合ってよかったです。……疲れました」

「すまないな、疲れるような事をさせちゃって」

「構いませんよ、好んでやってるんですから」

「そう言ってくれると助かるな」

そのまま箸を進めて、腹を満たしていく。

しかしそんな時、空間が裂けた。

「っ！？」

「！？」

水姫と俺は同時に武器を構えた。

「そんなに警戒しなくても良いわ。私よ、私」

「紫……か」

「全く……こっちは朝食中だというのに……」

俺達は武器をしまった。

「あら、ごめんなさいね。……ところで頼みがあるのだけど……」

「なんだ？」

「一日だけ水姫を貸してほしいのよ」

正直、この言葉にイラッとした。

”貸して”って事は人を物として見てる気がするからだ。

「水姫は物じゃない。本人に聞くべきだろう」

「水姫。どうかしら？」

「私は……主が良いなら構いません」

「ちなみに何故、水姫なんだ？」

「この子にしか出来ない事をやるからよ」

「……」

水姫は黙り込んでいた。

どうやら俺の指示を待っているようだ。

「水姫、気分転換がてら出かけてこい。ただし夜には帰ってこいよ？」

「……了解です」

「あ、そうそう。水姫、こっちに来て」

「はい、なんでしょうか？」

紫は水姫に耳打ちした。

すると水姫の目の色が変わった。

「やります！！　それでは主、行ってきます！！」

「あ、あぁ。いってらっしゃい」

「じゃあ、またね」

紫と水姫は空間の裂け目に消えていった。

「……結局なんだったんだ？」

俺はまた朝食を食べだした。

（それにしても……紫は水姫に何を吹き込んだんだろうな……。あ、この山菜うめぇ）

ただ家の中には箸が皿に当たる音が響いている。

「……そうだ。少し飛び回ってみるか」

俺は食器を片付け、出かける準備をした。

「っと、メモをとりあえず残しておこう……。よし、行くか」

俺は家から飛び立ち、適当に幻想郷を周りだした。

第１１話　真紅の館にて

「わけもわからずヤバそうなところに来てしまったな……」

目の前には全てが深紅に染まっている館が建っている。

そして門の目の前には寝ている人がいる。

「う～ん……どうする？　……通りすぎるか」

俺は飛ぼうとした。

しかしその前に

「お待ち下さい」

誰かが話し掛けてきた。

「ん？　誰？」

俺が振り向くと、メイド服を着た銀髪の女性が居た。

「これは失礼しました。私はこの館のメイド長をしております、十六夜　咲夜と申します」

「で、そのメイド長が俺に何の用だ？」

「お嬢様が貴方にお会いしたいそうで、来ていただきたいのです」

「……別に良いよ」

「それではついて来て下さい」

俺はメイド長について行き、館へと入った。

そしてとある扉の前に来た。

コンコン

「お嬢様、お客様をお連れいたしました」

「入っていいわよ」

咲夜は扉を開けた。

するとそこには蝙蝠のような羽を持つ少女が居た。

「はじめまして、風戸　響介。私はこの紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ」

「名前を先に言われると自己紹介のしようが無いな……まぁ良い。

で、俺に何の用だ？」

「貴方、博麗の巫女である霊夢と魔理沙を倒したそうね」

「ん？　まぁ……そうだな」

するとレミリアは真剣な眼差しで用件を言った。

「かなり強い貴方に頼みがあるのよ」

「……頼み？」

「妹のフランを……変えてほしいの」

「……どういう事だ？　詳しい説明をくれ」

「妹様は少々気が触れていて能力を乱用してしまう為、地下で幽閉されているのです」

咲夜が何か違う説明した。

まぁ情報としてはありがたいけどな。

「それで、俺にどうしろと？」

「貴方みたいな人がフランの友達になってくれれば、変わると思うの。……お願い！！　フランと友達になってあげて！！」

「……出来れば家族事には首を突っ込みたく無いんだがな……よし、引き受けた」

「あ、ありがとう！！」

「ただし！！　……条件がある」

「何？出来る事ならなんでもするわ」

俺はある意味、驚く条件をだした。

「とりあえず終わったら昼飯を用意してくれるか？　……今日、昼飯が無くてな……」

「……え？　そんな事で良いの？」

「あぁ、別に構わない」

「わかったわ。好きなだけ食べさせてあげるわよ」

「よし。ならその妹さんに会いに行くとするか」

俺は体を伸ばして扉に向かって歩きだした。

「咲夜、彼を案内してあげて」

「かしこまりました」

俺と咲夜は地下へと向かった。

今度は巨大な扉の前にいる。

とりあえずここに来るまでに色々と聞いた。

フランの能力、どんな子なのか……。

聞く限りだと結構ヤバイ子のようだ。

コンコン

咲夜は扉を叩いた。

「妹様、お客様です」

「入っていいよ～」

俺が入るとそこには不思議な羽を持った少女がいた。

「貴方はだ～れ？」

「俺は風戸　響介。君と友達になりに来たんだ」

「ふ～ん。私はフランドール！！　気軽にフランって呼んでね！！
響介！！」

「あぁ、よろしくな。フラン」
なんだ、ただの無邪気な少女じゃないか。
予想が当たらなくて良かった。
それにしても、この部屋は血のにおいがかなり強い。
普通の人なら吐くぐらいのにおいだ。
しかし俺は全く不快を感じずにいた。
やっぱり人間じゃないのかなぁ？
「妹様。それでは失礼致します」
「うん」
咲夜は部屋から出ていった。
「ねぇ、響介」
「ん？　なんだ？」
「響介は私が怖くないの？」
フランがそう質問してきた。
「怖くないよ。全くね」

「なんで？　私はたくさん人を殺したりしてるんだよ？」
「そんな事言ったら、俺の方がたくさん殺したりしてるよ。様々な生き物をね。……ん？　俺、今何を？」
今、自分でもわからない事を言ってしまった。
「ん？　どうしたの？」
「いや、なんでも無い。で、なんでそんな質問を？」
「えっとね。みんな私を嫌うのに響介だけはそんな様子がないから……」
今までフランは様々な人に避けられてきたのだろう。
「だって俺とフランは友達だろう？だから避けるような事はしないさ」
「ありがとう！！　響介！！」
フランが抱き着いてきた。
むぅ……かわいいな。
「そろそろ遊ぶか？」
「うん！！　何して遊ぶ？」

「う～ん……フランは何して遊びたい？」

「弾幕ごっこ！！」

「よし、受けてたつ！！」

俺は知らなかった。

フランの強さを。

「星穿の神槍！！」

俺は槍を取り出した。

「レーヴァテイン！！」

フランは剣を取り出した。

「それじゃあ行くよ！！」

「来い！！」

フランはレーヴァテインを振ってきた。

俺はそれを神槍で防ぐ。

ガン！！

フランの一太刀は結構重かった。

このかわいい外見で、こんな重い一撃を放ったのが驚いた。
競り合いながらフランが話し掛けてきた。
「響介って強いの！？」
「多分な」
「それじゃあ試しにスペル行くよ！！」
「禁忌『フォーオブアカインド』！！」
フランがスペルを発動するとフランが４人に増えた。
「４人に増えるか……」
「さぁ響介！！」
「このスペルを！！」
「私の弾幕を！！」
「耐え切れるかな！？」
４人が別々の弾幕を放つ。
俺は何とかステップで避けていく。
しかし中々難しい。
「隙間が少ないなぁ……」

「さぁ、早く攻略してよ！！」
「そうしないとつまらないよ！？」
「響介がどう攻略するか！！」
「凄く楽しみだなぁ！！」
フランが凄く楽しそうだ。
「それじゃ、俺もスペルを使うとするか！！」
「念砲『サイキック・インパクト・ブラスター』！！」
俺はルーミア&ミスティア戦での技をスペルにして使った。
太いレーザーを放ちフランを全員巻き込んで、大ダメージを与える。
「「「「きゃっ！？」」」」
3人のフランが消えて、1人だけ残った。
「さてと、まず一つだな」
「やっぱり強いみたいだね……それじゃあ次はこれだよ！！」
フランはスペルを構えた。
「禁忌『恋の迷路』！！」

フランを中心に凄い量の弾幕が放たれる。
なんとか回避するが、量がハンパじゃない。
「……止まる事を許されないのか」
「恋は鮫のようなもの。常に動いてないと死んでしまうんだよ」
「あ、なんかそれ聞いた事ある」
まぁ弾幕の方も動いてないと当たってやられるもんなぁ……。
とりあえずスペルを終わらせないと……。
「踏み込む！！　はぁ！！」
俺はフランの懐に飛び込んだ。
そしてまた武器がぶつかり、競り合う。
「中々やるね！！　今まで私と遊んだ人は多いけど、ここまでやる人は久々だよ！！」
「ん？　それじゃあ、ここまで来れなかった人はどうなったんだ？」
「……みんな壊れちゃったの。私が何を話し掛けても答えてくれないんだ」
「！？」

人間が壊れた……これは”狂った”か”死んだ”かのどちらかを意味する。

恐らくこの部屋の血のにおいは、今までフランと遊んだ人がいた証拠なのだろう。

しかし、ここまでにおいが強いなら……ヤバいな。

「まぁ良いや。その話は後で聞くとしよう。今は……思いっきり遊ぼうか！！　フラン！！」

「うん！！　負けないからね！！」

俺とフランは全身全霊の戦いを始めた。

第１２話　狂気の妹

「一回スペルをやめて、純粋な格闘戦をしようじゃないか！！」

「私は構わないよ！！」

「それじゃ……いざ尋常に！！」

「勝負だ！！」

俺とフランは空中で神槍とレーヴァテインをぶつけあう。

そのシーンを例えるなら、トラン〇ムライザーとス〇ノオがぶつかり合う感じだな。

「はぁぁぁぁ！！」

「うぉぉぉぉ！！」

お互いの攻撃は防がれ、中々ダメージが与えられない。

「フランは凄く強いなぁ！！」

「えへへ！！　そう！？」

「あぁ！！　でもな……まだ甘い！！」

「きゃぁ！！」

俺はレーヴァテインを受け流し、そのままフランの背中を蹴った。
そしてフランに向かって、槍の先を向ける。
「喰らいな！！」
俺は槍の先からレーザーを放った。
余り太くは無いが、中々の威力を持っている。
「くぅっ！？」
ドォォォン！！
フランが落ちたところに煙が広がる。
「……少しやり過ぎたかな？」
俺は床に降りた。
そしてフランが出てくるのを待つ。
その時、煙が全て吹き飛んだ。
「アハハハハハハ！！」
狂ったように笑ったフランが立っていた。
さっきの体制なら背中から落ちてるはずなのだが、フランはしっかり仁王立ち。

しかも無傷。

一体どうやったら、あんな一瞬で体勢を直せるんだろ……っとそんな事よりフランが豹変した。

まるで狂気に飲み込まれた感じだ。

「おい？　フラン？　どうした？」

「イイネェ！！　キョウスケトタタカウノタノシイヨ！！」

「これが咲夜が言ってた事か……とりあえず止める！！」

俺はフランに斬りかかった。

しかしフランはレーヴァテインを持つ片手で止めた。

「サァ！！　モット……タタカイヲタノシモウヨ！！」

「あぁ。ただし、俺が勝つ！！」

俺は一回距離をとった。

そして槍を消してスペルを構える。

「念剣『サイコソード』！！」

これは念動力を固形化させて、剣を作り出すスペルだ。

槍だと一撃の威力が剣より弱い。
だから一撃の威力を上げるため、日本刀を作りだした。
「それじゃ、行くぞ！！」
「イイヨ！！　キテ！！　ソノヨユウ、ワタシガコワシテアゲル！！」
俺はフランの真っ正面から突っ込んだ。
するとフランはレーヴァテインを横に振ってきた。
「瞬間移動」
それを瞬間移動で避けて、フランの後ろに回り込む。
「キョウスケハスゴイナァ！！　サクヤトニタヨウナコトガデキルナンテ！！」
「へぇ～咲夜も瞬間移動が出来るんだな」
「キョウスケ！！　スペルイクヨ！！」
「来い！！」
「禁忌『スターボウブレイク』！！」
フランがスペルを構えた後、パァン！！という音がなった。

その音の後、フランの弾幕が飛んでくる。

「密度が高いな……うぉっ！？」

頑張ってステップして避けていたのだが、俺の肩を弾が掠った。

「アハハハハ！！　シッカリヨケテヨ！！　マダマダアソビタインダカラサァ！！」

「まぁ死なない程度に頑張るさ」

俺は少しずつタイミングを掴んできた。

音が鳴り、弾幕が飛んでくる。

そしてまた音がなる。

俺が目指すのは音がなった直後だ。

理由はフランの弾幕を良く見ると、出した直後は少しだけ止まってから俺の方へ向かってくる。

俺はその止まる僅かな瞬間を狙って瞬間移動して攻撃を仕掛けるつもりなのだ。

そしてその瞬間がきた。

パァン！！

「今だ！！　瞬間移動！！」

俺は一瞬でフランの裏に回った。

「念雷『サイコプラズマ』」

俺は体から雷を放った。

この技は周囲４ｍに念で作り出した雷を放ち、当たると短時間だが痺れるのだ。

フランは直撃して痺れた。

「ビリビリシテ、ウゴケナイヨ……」

「少しおとなしくしてな！！」

俺はさらにスペルを構えた。

「移山『大山重圧撃（マウンテンプレッシャー）』」

俺は印を結び、部屋の天井に巨大な岩を出現させる。

そしてフラン目掛けて落とす。

「当たれぇぇ！！」

俺はこれで決まったと思った。

しかし、決まらなかった。

バゴォォォォォン！！
岩がぶつかる前に爆発したのだ。
そして俺の体に激痛が走った。
「ぐぁぁぁぁぁ！！」
ドサッ！！
俺は床に倒れ込んだ。
力を振り絞って体を見ると一閃された後があり、血が流れ出ている。
「キョウスケハツヨイナァ。マサカイッシュンノスキヲツイテクルナンテサ」
「……」
「キョウスケ？　ナンデシャベッテクレナイノ？　コワレチャッタノ？」
「……壊れては……無いよ……まだやる気だ……」
俺は力を振り絞り、声を出した。
「ヘェ……。ナラマズハソノケンヲコワスネ」
パリィィィィン！！

「なっ！？」

フランが手を握ると俺の念剣が砕けた。

そしてフランがレーヴァテインを構える。

「ソレジャ……サヨナラ」

思いっきり振り下ろしてきた。

「星穿の……神槍！！」

俺はなんとか槍で受け止めた。

「ソノヤリモコワシテアゲルヨ……アレ？　テガニギレナイ……」

フランが俺の槍を破壊しようとしたが、手が握れなかった。

「壊させて……たまるかよ……」

理由は俺が念動力でフランの手を止めていたからだ。

「キョウスケハフシギナチカラガアルンダネ……」

「まぁ……な……ゴホッ！！　……ヤバいな」

「ケンガダメナラ、ダンマクデコワシテアゲルヨ」

フランは使っていない手にスペルを構えた。

「禁忌『過去を刻む時計』」
俺は死んだな……と思った。
しかし、
「おやめ下さい！！　妹様！！」
「サクヤ……？」
間一髪で咲夜が助けてくれた。
「咲……夜か……」
「響介！！　大丈夫！？」
「あぁ……一応な……」
「とりあえず私の後ろに居て。隙を見て逃げるから」
それを聞いたフランは不満そうに言った。
「ジャマシナイデヨ。ワタシハキョウスケトアソンデルンダヨ？」
「フラン……俺は一回……休憩だ……少しだけ……咲夜と……やってくれ……」
「シカタナイナァ……サクヤ。アソビアイテ、ヨロシクネ」

「かしこまりました。妹様」

（俺は……少し寝ると……しよう）

俺はフランと咲夜の会話を聞いた後、眠りについた。

「……介……響介……」

誰かに呼ばれる事がしたから起きると、俺は全て白に染まる世界の中にいた。

そしてそこには、人の影があった。

「……ん？　誰だ？　……どこかで聞いた事があるんだが……」

「私よ、私。貴方に銀狼を授けた張本人よ」

「うぅ……思い出せそうなんだが……」

「どうやらまだ記憶が治りきってないようね……まぁ良いわ。……響介、貴方はかなりの窮地に立たされてるようね」

「正直、かなりヤバい。今すぐ戻って咲夜を助けないと……」
俺はなんとかして戻る方法を探していた。
「咲夜ってメイドを救いつつ、フランって子を止める方法……教えてあげようか？」
「そんな方法があるのか！？　教えてくれ！！」
「いいけど……そのためには銀狼とかの協力が必要なのよ」
影がそう言うと、周りに銀狼・黒龍・天星・鳳凰が現れた。
「響介にはまだやるべき事がある」
「こんなところで死なれちゃたまんないぜ？」
「響介には未練を残して欲しくないし」
「我等の力を貸そう」
鳳凰達は承諾してくれた。
「なら、私が言う手順に従って。そうすれば出来るわ」
鳳凰達は俺を囲んだ。
そして儀式のような事が始まった。

第１３話　復活と孤立空間

影が鳳凰達に順序を説明している間、暇だった。

俺は焦る気持ちを抑えている。

そして儀式的な何かが本格的に始まった。

俺を囲んで、鳳凰達は力を溜めはじめた。

俺は謎の人影に話し掛けた。

「そういえばさ……この儀式みたいな奴をやると何か変化があるのか？」

「ん～……記憶が戻るとか、戦いが終わるまで姿が変わるとかあるかもね」

「へぇ～……え？　記憶が戻る？」

「うん。完全に戻る訳じゃないけど」

「……まぁ足りない記憶は自分の力で取り戻すさ」

そんな事を話していると鳳凰が、影に向かって頷いた。

「準備が出来たみたいね。……それじゃ始めて」

「はぁぁぁ！！」

「うぉぉぉ！！」

「……」

「うぬぅぅ！！」

俺を囲む鳳凰達から力が注ぎ込まれる。

それと同時に記憶が蘇っていった。

楽しい過去から思い出したくない記憶まで。

それと同時に物凄く強い頭痛が走る。

「くっ……うわぁぁぁぁぁぁ！！」

「頑張って耐えて！！」

「そんな事……言われなくても……わかってる……ぐぅっ！！」

俺は頭痛に耐える。

本当に痛みが尋常じゃない。

頭が裂けるような痛み……としか例えようがないぐらいだ。

そしてこの痛みはしばらく続いた。

始まってからどれぐらい経ったのだろう。
やっと頭痛が収まった。
本当は短かったのかもしれないが、俺はとても長く感じた。
「はぁ……はぁ……大体は……思い出した」
長い痛みから解放され、少し膝をついた。
「大丈夫？」
「あぁ、もう大丈夫だ」
「そう……なら早く戻ってあげたら？向こうはヤバいんじゃない？」
「っ！！　……そうだった！！　……でもどうやって戻れば……」
俺は必死に戻る方法を考えた。
急いで戻らないと……咲夜が危ない。
すると影が俺の後ろから話し掛けてきた。

「簡単よ？　念じればいいんだから」

「念じる……？」

「そう、帰りたいって強く願えば良いの」

「わかった……色々とありがとう……あれ？誰もいない……」

俺が後ろを向くと影が居なかった。

しかし声だけは聞こえた。

「あ、そうそう。今回だけ特別に本来の力を解放しておいたから使うと良いわ……んじゃ、またね」

「お、おい！！　……あれは一体？　……今は早く行かないと！！」

俺は帰りたいと念じ、咲夜達のところへ向かった。

俺が戻ると咲夜とフランが戦っていた。

しかし咲夜はもうボロボロだ。
俺の体は服が裂けているが、体は治っていた。
「あ、体が治ってる……よし……フランと遊んでやるか」
俺は起き上がった。
「くっ……響介を連れて逃げる暇が無いっ！！」
「咲夜、バトンタッチだ。俺が行く」
俺は咲夜の肩を掴み、前に出る。
「え？　大丈夫なの？　その左目は？」
「まぁ……色々と後で説明する」
「ア、オキタンダネ。ナラツヅキヲ、ヤロウヨ」
フランがレーヴァテインを構えて言った。
「おう、もちろんだ。ただ、少しだけ待ってくれ」
「イイヨ」
「……赤眼解放！！」
俺は力を解放した。

すると槍が日本刀に変化した。

「キョウスケノメ……リョウホウトモ、マッカニソマッテルネ」

「へぇ……両目とも染まったのか。……それじゃフラン。続きをやろうか！！」

「ウン！！　コンドハ、キュウケイナシダヨ！！」

「わかってるって！！」

俺とフランはぶつかり合った。

そして何度かぶつかり合った後、競り合う。

「やっぱりフランは強いなぁ！！」

「キョウスケモ、サッキヨリツヨクナッテルヨ！！」

「ふふふ……楽しいなぁ！！」

「アハハハハ！！　ワタシモタノシイヨ！！」

ぶつかり合いながら、喋っていた。

「咲夜！！　今何時かわかる！？」

「え？　……１０時３８分よ」

「了解！！　……フラン！！　悪いけどさっさと終わらせるからな！！　……あと咲夜は部屋から出ろ！！　危ないぞ！！」

「わ、わかったわ！！」

咲夜は扉へ向かっていった。

「ソノセリフ、コレヲコウリャクシテカライイナ！！」

「秘弾『そして誰もいなくなるか？』」

フランはスペルを構えるとどこかに消えてしまった。

扉に向かっていた咲夜の姿も消えている。

どこかの推理小説で読んだ状況……クローズド・サークル……だっけ？

ここはフランの弾幕と俺だけの空間で、外界との接触を断たれた……こんな感じだな。

「……耐えきってみせれば良いんだな？　……上等！！」

俺は後ろからついて来る物体から放たれる弾をしっかりと避ける。

「キョウスケハヤッパリスゴイナァ！！　カンタンニヨケルンダネ！！」

どこからともなくフランの声が聞こえた。

ここは接触を断たれた空間で、ここにいるのは俺だけのはず。
あくまで予想だが、フランはスペルを使ってる側。
だから使用者であるフランは接触を許されるんだろう。
「……覚醒した俺を舐めるなよ？」
「ナメテナンカナイヨ！！　マダマダイクカラネ！！」
次々と弾が俺目掛けて飛んでくる。
「まぁ、ランダム弾とかマシンガンよりは簡単だもんな……」
「マシンガン？　ナニソレ？」
「まぁこっちの世界で言うと……ただの人間が弾幕を出す為の道具だな」
「へェ～。ソンナノガアルンダネ」
「まぁ俺はマシンガンで狙われた事があって、弾幕を避けるのなら得意なのさ」
なんでマシンガンで狙われたのか、理由はいずれ話すつもりだ。
「デモ、ユダンシナイホウガイイヨ！！　ホンバンハコレカラダカラネ！！」
フランがそう言うと弾の動きが変わった。

周りから円の形で弾が集まってきた。

「今度は周りからか……ま、なんとか避けきるさ」

避けきる。

この言葉を言った理由はたった1つだ。

このクローズド・サークルはスペルで作られたもの。

スペルブレイクさえすれば、俺はこの空間からの脱出が出来る。

そして脱出さえすれば、勝機は見えるはず。

だが、この空間でやられてしまえば俺は脱出が出来ずに一人で死を迎える事になる。

死を迎えるにしても孤独死みたいに一人で死ぬのはお断りだ。

それにフランをどうにかしないと昼飯……違った……俺の気が済まない。

「俺はこの孤立空間（クローズド・サークル）から脱出してやる！！」

俺は自らを鼓舞して、脱出した時の為に力を溜めた。

「キョウスケ！！　コノスペルヲワタシニコウリャクシテミセテネ！！」

「あぁ、もちろんだ。そしてフラン。……お前を狂気から解放してやるからな！！」

ここからフランの弾幕が激しくなった。

いや……【ループするスピードが速くなった】と言った方が正しいか。

速くなるにつれ、避けるのが大変になる。

一つの輪を避けても、すぐに輪がやってくる。

さらにさっき避けた輪が戻ってきた。

もうかなり面倒だ。

だが、このスペルは空間を制御しているようなもの。

フランはかなりの力を使っているはず。

だからそろそろ空間に裂け目のようなものが出来ても良いと思う。

「あ～……そろそろ空間の裂け目が出来ても……。裂け目だ」

俺が少し上に向くと、裂け目のようなものがあった。

「この空間から出て……フランと遊んで……助け出す！！」

俺は全力で空間の裂け目を刺し貫いた。

第１４話　賭けと狂気と魂

パリィィィィン！！

空間の裂け目を刺し貫いた俺はそのまま抜け出した。

「ヤッパリキョウスケハツヨイナァ！！　コノスペルマデコウリャクスルナンテサ！！」

「まぁな。あんなところに一人で居るよりフラン居た方が楽しいから頑張ったんだ」

「キョウスケ……コンナワタシトイテタノシイノ？　ドウシテ、コンナワタシノタメニガンバレルノ？」

「もちろんフランと居ると楽しいよ。それにフランと俺は友達だろ？　だから俺は頑張れるんだ」

「キョウスケ……」

フランは涙を流していた。

「ほら、泣くなよ。フラン、まだ遊んでる途中だろ？　泣くのは遊び終わってからだ」

「ワ、ワカラナイ……ワカラナイヨ……ウ、ウゥ！！」

フランは頭を抱えて、苦しんでいた。

「フラン！！」

「ウ、ウァァァァァァァァァァァァァ！！」

「ＱＥＤ『４９５年の波紋』！！」

フランは叫んだ後、スペルを掲げた。

フランから弾幕が波紋状に放たれ、跳ね返ってくる。

「ヤバいな……フランを止めないと！！」

「ワカラナイ！！　ワカラナイヨォォォォォォ！！」

フランがそう叫ぶ度に波紋が広がっていく。

「どうにかしてフランを止めないと……」

「ワカラナイ！！　ワカラナイトキッテ、ドウスレバイイノォ！！」

フランは頭を抱え、叫んでいた。

しかしフランばかりを見ていると、波紋に当たってしまう。

「とりあえず少しずつ近づくしかないか……」

「ウァァァァァァァァァ！！」

「かなり辛いな……上手く避けないと到達出来ない……」

俺はなんとか間を抜い、フランに近づくが、近づくにつれ、弾幕の密度が高くなっていく。

しかし俺はその中を進んでいった。

そしてフランに刀が届くぐらいまで近づいた時、

「アァァァァァ……」

フランの声が収まった。

それと同時に弾幕も収まる。

「フラン？　大丈夫か？」

「……フフフ」

「おい、どうしたんだ？」

「アハハハハ！！　ワカッタヨ！！　ワカラナイナラコワシチャエバイインダ！！」

フランは俺の方を向き、対峙する。

「サァ！！　キョウスケヲコワシテアゲルヨ！！」

「わからない物を壊したって根本的な解決にはならない！！　知る事も大切なんだ！！　それをフラン！！　お前にわからせる！！」

俺は日本刀を構え直して、少しだけ離れた。

「ソレジャア、アラタメテイクヨ！！」

また波紋が広がってきた。

しかし量がさっきより増えている。

「もうフラン……やけくそじゃないか？　だが、やけくそな分……弾の量がヤバいな……」

「アハハハハハ！！　コワレチャエェェェェェェ！！」

「こうなったら分の悪い博打だ……即興でスペルを作るしかないな」

「博打『貫け！奴よりも速く』」

俺は刀を構えて、動きを止めた。

そして力を溜める。

「ナニ？　モウアキラメタノ？」

「いや、諦めてなんかいないさ。フランを助け出せるか否かの博打をしてるんだ」

「ワタシヲ……タスケダス？　ナンデ？　ドウシテ？」

「俺はフランと一緒にやりたい事があるからだ。あとで昼飯をフランと一緒に食べたいからね」

俺がこう言うとフランは少し考えて、喋りだした。

「……オヒルゴハン？　デモ、キョウスケハオヒルゴハンヲタベレナイヨ？」

「いや、意地でも食べるさ。フランと一緒にな」

「ドウシテ……ドウシテソコマデワタシニカマッテクレルノ？」

「友達だからさ」

俺はフランの質問に即答すると、フランは条件のようなものを出してきた。

「ソレジャア……ワタシヲタオセタラ、イッショニオヒルゴハンヲタベテアゲル」

「よし、さらにやる気が出た。……さぁ、来い！！」

俺がそう言った途端、弾幕が大量に放たれた。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！！」

俺はさらに力を高めた。

（はぁ……本来の力を解放したって……俺のリミッターを解放しなきゃ大差ないよ……）

心の中でそんな事を呟きつつ、腰を落とす。

フランの弾幕がどんどん飛んできて、俺を倒そうとする。
「この一撃……絶対フランに届かせる！！」
俺は刃を横にして構えた。
そしてフランの弾幕が目の前にくる。
だがその前に、俺のスペルが発動した。
「この博打……俺の勝ちだ！！」
フランの密度が高い弾幕の中を俺は掠りながら進む。
「エ！？　ナンデダンマクガアタラナイノ！？」
フランは驚き、さらに波紋を作り出した。
俺のスペル「博打『貫け！奴よりも速く』」は、いわゆる確率で決まるカウンタースペルだ。
実際は格闘戦で使うものだが、今回は弾幕で使ってみた。
カウンターが成功すると、ありとあらゆる弾幕を避けて相手へと近づく。
ちなみに今回の成功確率は３９％だった。
しかし問題なのは近づいたらどうするかだ。

（フランを傷つける訳にはいかないし、どうしよう……）

そんな事を考えている内にフランの目の前に来てしまった。

（仕方ない……あれをやるか）

「まずは痺れろ！！」

「念雷『サイコプラズマ』！！」

俺はまず念雷でフランを痺れさせる。

力を解放したおかげで電圧はかなり上がっている。

「ウゥ……サッキヨリシビレテルヨ……」

俺はフランの腹に日本刀の先端を向ける。

「苦しいかもしれないが我慢してくれよ！！　フランの魂（まぶい）から狂気をえぐり出す！！」

そう言って俺はスペルを構えた。

「魂斬『マブイエグリ』！！」

この技は実際、相手の体に日本刀を突き刺して”肉”と”魂”をえぐる技なのだが……手加減すると、”魂”の一部分だけをえぐったり、妖力等の力を流れだせる事が出来る。

今回はフランを狂気から救い出すためにこの技を使った。
手加減して狂気を魂からえぐり出し、体から抜き出すつもりだ。
「フランの魂(まぶい)を……救い出す！！」
まず、フランの腹に日本刀の刃で円を描く。
黒い円が出来るが、フランにも服にも傷はついていない。
これには目印とか、特殊な仕掛けがある。
特殊な仕掛けというのは、”刀が触れなくても魂がえぐれるようになる”という事。
そして”魂から切り離した物を引き抜く事が出来る”ようになる。
傷つけないためには絶対必要不可欠だ。
次に狂気を魂から切り離すため、日本刀でえぐる真似をする。
えぐって無いように見えるかもしれないが、思いっきりえぐっている。
すると魂をえぐられているフランはやはり痛いのか、
「クッ……ウァァァァァァァ！！」
フランが叫んだ。

「やっぱり魂を弄られるっていうのはキツイよな……でも我慢してくれ！！　……よし、切除完了」

次はフランの体の中から切り離した狂気を取り出す。

腹に描いた円に手を翳す。

そして手に力を込めて念じる。

（フランの狂気を……俺の手に）

すると俺の手に赤い霧のような物が現れた。

どうやらフランの狂気なのだろう。

「何か狂気を込める物は……黒龍の宝珠で問題ないな」

俺はポケットに入っていた赤い宝珠を取り出す。

そして狂気をその珠の中に入れていく。

「アァァァァぁぁぁ……」

フランから狂気がどんどん抜けていき、宝珠の中に全て入った。

「とりあえず保険で、封印……っと」

少し封印を施して宝珠を回収した後、フランをお姫様抱っこした。

「フラン。大丈夫か？」

「……うん。痛かったけど大丈夫だよ」

「そうか。そいつは良かった……さてと、フラン。昼飯を食べに行くか？」

「うん！！　行く行く！！」

俺はフランをお姫様抱っこしたまま、扉へ向かって歩きだした。

第15話　ドッキリ大作戦

「さてと……部屋を出るとしようか」

俺は自らの姿を戻して、フランをお姫様抱っこしたまま扉の前に立った。

「でもどうやって扉を開けるの？　私を抱えてたら開けられないよ？」

「いや、扉は開けないよ。瞬間移動するんだ」

「え？　瞬間移動？」

「あぁ。扉を飛び越えるのさ。……今回は特別でフランも一緒にな」

「本当！？」

「もちろん」

「やったぁ！！　早く！！　早く！！」

フランが大はしゃぎした。

でもフランにとっても、俺にとっても所要時間は1秒も無い。

「それじゃフラン。しっかり掴まってろよ？」

「はーい！！」

フランは俺の首に腕を絡ませていた。

まぁ掴まってる事には変わり無いけどさ……普通、フランぐらいの子って俺の予想は服を掴むと思ってた。

俺は少し遅れてるのかなぁ？

「瞬間移動」

俺とフランは扉の向こうへ飛んだ。

そして一瞬で扉の向こうに着いた。

「という訳で移動完了っと」

「いいなぁ……。私もそんな力が欲しいなぁ……」
「まぁ、フランも成長すれば努力次第で手に入るんじゃないか？
まだまだ長い人生なんだし」
「頑張ってみようかな？　その技を習得したら、私と戦ってね？
響介」
「あぁ、俺が生きてたらな」
俺とフランが会話していると
「妹様、ご無事ですか？」
咲夜が話しかけてきた。
「うん、大丈夫だよ」
「これでしばらくは大丈夫だ」
「それは良いのだけど……なんで貴方は妹様をお姫様抱っこしてるのかしら？」
「いや、なんとなく……と言うかなんと言うか……」
「響介～。また瞬間移動してよ～」
フランが俺の首に腕を絡めたまま言った。
「咲夜でも出来るから咲夜で良いんじゃないか？」

「咲夜はお姉様のメイドだもん。だから私は響介にやってもらいたいんだよ？　やって？」

上目遣いで言われた。

やべぇ、破壊力高過ぎだろ。

ロリコンで無くとも、屈するな、絶対。

「仕方ない……咲夜、それで構わないか？」

「……えぇ、妹様がそれで良いなら」

「で、どこまで飛ぶんだ？」

「お姉様のところ！！　急に出てきて驚かしたいの！！」

「わかった。咲夜も瞬間移動で来てくれ」

「えぇ、わかったわ」

「瞬間移動」

俺はレミリアのところまで飛んだ。

「はい、到着っと」

「同時に着いたわね」

「本当に速いなぁ～」

俺達はレミリアの元に着いた。

そしてレミリアを探してみると、

「ゴホッ！！　ゴホッ！！」

手に紅茶を持ってむせていた。

「だ、大丈夫ですか！？　お嬢様！！」

「……どうやら驚いた……みたいだな」

「作戦大～成～功～！！」

そんな事をものともせずレミリアはフランを見て驚いた顔をした。
そして紅茶を置き、フランに近づいて言った。
「フラン……今までごめんなさい……。私のせいで……」
「……ううん、良いの。もう過ぎた事だから」
レミリアとフランはお互いに抱きしめ合った。
俺はそんな光景を見て、
「いやぁ、良かったなぁ」
と呟いた。
俺はこの雰囲気を壊さないように脱出しようとした。
しかしそんな良い雰囲気をぶち壊す出来事が起きた。
それは……
グゥ〜〜〜〜。
俺の腹が鳴ったのだ。
「やっちまったな……俺」
「なら昼食にしましょうか。咲夜、お願いね」

「畏まりました」
咲夜は部屋から出ていった。
「レミリア。少し来てくれ」
「何？」
俺はレミリアを呼んだ。
「フランの狂気だが、俺が持っててていいか？」
「え？　どういう事？」
「フランの狂気はこの宝珠の中に入ってるんだ。で、フランに破壊されないように俺が持っててていいか？　って事」
「持ってて良いわ。あの子に狂気を近づける訳にいかないもの」
「了解だ」
そんな話をしてるとフランが近づいて来て、
「何〜？　内緒話？　何話してたの？」
と言った。
「あぁ、少しな。ちなみに内容は秘密だ」
「え〜、良いじゃん。教えてくれたって〜」

「ま、聞かれちゃ駄目だから内緒話をしてたんだ。許してくれ」
俺がそう言うとフランが考えた後に言った。
「う～ん……わかった。でもそのかわりに条件を出していい？」
「なんだ？」
「……また紅魔館に来てくれるよね？」
「なんだ……そんな事ならＯＫだ。その時はまたご飯をいただきに来るかもな」
「じゃあ約束だよ？　絶対だからね？」
「あぁ、絶対来るからな」
フランが俺に抱き着いてきた。
そんな事をしていると扉が開いた。
「ねぇ、レミィ。色々と混ざり合った強い力を感じるのだけど……
……」
入って来たのは紫色の服を着て、長い髪をした少女だった。
「あぁ、そこの客人の事ね」
「客人？　その客人がフランに懐かれてるのは一体どういう事？」

「簡単に言うならフランと戦って、狂気から解放してくれたのよ」
「あの狂気に飲まれたフランに勝つなんて……彼は何者なの？」
なんか二人で話してるなぁ……。
ま、聞こえる限りでは俺についてみたいだが……気にしないでおこう。
と考えていたが、レミリアがその少女を連れて来た。
「響介。貴方に紹介しておきたい人がいるの」
「私はパチュリー・ノーレッジ。レミィの友人よ」
「俺は風戸　響介。色々と力を取り込んでいる者だ」
「パチェは紅魔館の図書館に居るのよ」
「へぇ～。ここには図書館もあるのか」
「そんな事より響介。……とても興味深いわ」
パチュリーは俺を観察しながら言った。
「興味深いって言われても困るんだが……」
「まぁ響介は色々な力を取り込んでるから興味を持たれても仕方ないよ」

「そんなものなのか……」

「そういえば力を使って出来る事とか無いのかしら？」

「力を使って……か。今わかるのはこれぐらいだな」

俺は念じて銀狼の姿になる。

「まさか……変化？」

「恐らくその部類だろう。ただしこの姿の時は妖力しか使えないデメリットがある」

「でもメリットとしては相手をしっかり騙せる……とかかしら？」

「俺もあまり理解出来ていないからな……メリットは模索中だ……ってフラン。尻尾はやめてくれ」

パチュリーと話していたが、フランが俺の尻尾で遊び始めていた。

「はーい……ふみゅぅ～」

フランは尻尾を弄るのはやめてくれたが、今度は抱き着いてきた。

「いや、何故抱き着いた？」

「ん～……なんとなくかな？」

「それで良いのか……」

「良いんじゃない？」

フランって大雑把なんだなぁ……

「まぁ今度、ここに来たら図書館に来なさい。色々と役に立つかもしれないから」

「あぁ、わかった」

そう言うとパチュリーは部屋から出た。

「フラ～ン。姿戻すぞ～」

「え～。もう少しだけ～」

「今度、やってあげるから今日は我慢するんだ」

「はーい……う～」

フランは渋々と離れた後、俺は姿を戻した。

その時、また部屋の扉が開いた。

「お昼をお持ちしました」

「それじゃ響介、食べましょうか」

「おぅ。わかった」

「私も食べる～」

俺とフランとレミリアは一緒にお昼ご飯を食べ始めた。

第１６話　冥界の白玉楼

昼食も食べ終わり、俺は紅魔館の門にいる。

「それじゃ、また来なさい」

「言われなくても来るさ。フランとの約束でもあるしな」

「そう。わかったわ」

「それじゃあな」

「えぇ、またいつかね」

俺は紅魔館を後にした。

ちなみに門番は寝ていたため、咲夜にナイフで刺されていた。

「ん～……まだ正午にはなってなさそうだな」
俺は人里に向かって歩いていた。
まぁ理由も何も無いけどな。
「グルルルル……」
そんな時、目の前に妖怪が現れた。
見た目は角の生えた狼で体長は３ｍを超している。
「お、妖怪か。何だ？　妖怪も昼飯の時間か？」
「グァァァ！！」
妖怪は俺の質問に答えるかわりに襲い掛かってきた。
そして鋭い爪で俺を引き裂こうとする。
「余り怪我をさせたくないんだけどなぁ……瞬間移動っと」
俺はその攻撃を避け、妖怪の横に立った。
そして槍を取り出し、地面に突き刺して力を込める。
すると……
バキッ！！

地面に輝が入った。
輝というか……地割れか？
どちらにしろ妖怪はそれを見て逃げ出した。
「さてと……先に進むとしようか」
俺は人里に向かって歩きだそうとした。
しかし、目の前で妖怪と戦っている少女がいた。
「せいっ！！　はぁ！！」
少女は日本刀を振るいながら戦っているが、巨大な荷物により行動が制限されているため、じり貧だ。
それに数的不利もある。
少女に対して、妖怪は武器付きで5体。
俺から見て、縦一列で味方を援護出来る隊列を組んでいる。
イジメみたいだな。
「くっ！！」
少女はかなりまずい感じだ。

「とりあえず助けるとしようか……。撃符『究極！ゲシュペンストキック』」

俺は空高く飛び上がった。

「究ぅぅ極！！　ゲシュペンストォォォォ！！」

叫んだ後、膝を曲げて蹴りの構えをした。

そして妖怪に向かって加速する。

「キィィィィック！！」

俺の蹴りは手前の妖怪に直撃した。

さらに次々と妖怪を巻き込んで突き進む。

そして妖怪5体全てを巻き込んだ後、曲げた膝を伸ばして蹴り飛ばした。

妖怪達は全て森の方向へ吹き飛んだのを見た後、俺は着地した。

「どんな妖怪であろうと……蹴り飛ばすのみ」

「……」

少女の方を見ると呆然としていた。

まぁいきなり目の前の敵が吹き飛ばされたから当たり前だと思う。

「お～い……大丈夫か～？」

「……はっ！？　だ、大丈夫です！！」

「なら良かった。それじゃ……」

俺はとりあえずその場を去ろうとした。

しかし、

「待って下さい！！」

呼び止められた。

「ん？　何？」

「あの……お礼がしたいので屋敷まで来て頂けませんか？」

「いや……お礼なんてそんな」

「お願いします！！」

深々とお辞儀された。

少女にここまでさせて断ったりしたら失礼だろう。

「仕方ない……そのお屋敷とやらに行こうじゃないか」

「あ、ありがとうございます！！　それじゃ付いてきて下さい。ご案内します」

俺は少女の後ろについて行った。

空を飛んでいる時、一つ気がついた事があった。

「あ、そういえば名前は？」

名前を聞いてなかったのだ。

「私の名前は魂魄　妖夢と申します。屋敷で庭師と世話係をしています」

「俺の名前は風戸　響介だ。よろしくな」

「ん？　風戸……響介？」

妖夢は少し考えた後、口を開いた。

「もしかして……霊夢さんと魔理沙さんを倒した人……ですか？」
「まぁ……そうだけど。……ってなんでこんなに広まってるんだ？」
「だって新聞に載ってますよ？　大々的に」
「新聞か……覚えておこう」
「あ、もうすぐ冥界の入口ですよ」
「え？　冥界の入口？」
俺は冥界と聞いて、一瞬恐怖を感じた。
「？　どうかしましたか？」
「いや、生きてる者が冥界に行って問題無いのか？」
「大丈夫ですよ。霊夢さんや魔理沙さんも入った事がありますから」
「なら問題ないか」
「それじゃ行きましょうか」
「あぁ」
俺と妖夢は冥界への扉をくぐった。
そして扉を抜けると雰囲気が変わった。

人魂が所々で飛んでいて、幽玄な景色が広がっているのだ。

「へぇ〜。ここが冥界か」

「この石段の先に私が住む屋敷があります」

妖夢が指を差した方向には、先が見えない石段があった。

「長っ……」

「それでは行きましょうか」

「お、おぅ」

俺と妖夢は石段を歩かず、飛んで屋敷に向かった。

余談だが妖夢が先に屋敷に行って、俺が瞬間移動した方が楽だと思ったのは屋敷の目の前に着いてからである。

日本の屋敷でよくあるような門の前に降り立った。
「よっ……と。屋敷に到着したみたいだな」
「はい。それでは中に入りましょう」
妖夢が門を開けて、中に入ったので俺もその後に続いた。
そして周りを見ると、
「すげぇ……」
とても綺麗な庭があった。
「ありがとうございます。そう言って下さると嬉しいです」
「妖夢は庭師だもんな。……それにしても綺麗に手入れがされている」
俺は庭に釘付けだった。
そんな時、一つの木が目に入った。
その木は枯れていて、元が何の木なのかわからない。
「響介さん。上がって下さい。幽々子様のところへご案内します」
「ん？　……あぁ」

俺は木の事を気にしつつ、屋敷の中に上がった。

俺は庭が見える客間のような場所に通された。

「それではここでお待ち下さい」

「あぁ、わかった」

妖夢は部屋から出ていった。

「ここの屋敷は中々だな……庭も綺麗だし」

俺は外の景色を見ていた。

さっきとは別角度だが、ここの庭はやはり凄いと思う。

京都のお寺か神社で見た、砂と石の模様も凄かった。

しかしここの庭も負けてはいないだろう。

そんな事を考えていると、襖が開いた。

「お待たせしました」

妖夢がお茶を持っていて、その後ろには外見からして幽霊っぽい人がいた。

二人は部屋に入り、座った。

「あら、貴方が妖夢を助けてくれた人なのね。ようこそ、白玉楼へ」

「へぇ。白玉楼っていうのか、この屋敷」

「とりあえず貴方の名前を聞かせて貰っていいかしら？」

「風戸　響介だ。色々と力を取り込んでいたりする」

「私は西行寺　幽々子。妖夢を助けてくれてありがとう。響介」

笑顔で言われた。

笑顔の破壊力高っ！！

大体の人はこれで落とせるだろ……。

「で、何かお礼をしたいのだけど……」

「いや、困った時はお互い様って訳で気にしないでくれ」

「なんか悪いわね……ご飯でも食べていく？」
「特に腹減って無いしなぁ……」
「ん～……ならどうしましょうか……」
幽々子は考え事を始めた。
別にお礼なんていらないんだけどなぁ……。
「あ、なら何かしてほしい事とかあるかしら？」
「え？　……そうだなぁ……」
「例えば……一晩此処に泊まるとかで良いんじゃないかしら」
なんか一晩泊まれって言われてる気が……。
「ん～……わかった。妖夢と近接戦闘有りの弾幕ごっこで決めよう」
「どういう事かしら？」
「俺が勝ったらお礼無し。妖夢が勝ったら、お礼を受けるって事だ」
「なるほどね。……わかったわ。妖夢、お願いね」
「畏まりました」
「さて、意地を通させてもらおうかな」

俺と妖夢は庭に出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1395u/

東方生活録

2011年11月27日23時53分発行